

栃木県埋蔵文化財調査報告第 394 集

松の木遺跡・山神塚

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道 121 号下石川工区に伴う発掘調査—

2019. 11

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

松の木遺跡・山神塚

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道121号下石川工区に伴う発掘調査—

2019.11

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

巻頭図版



松の木遺跡・山神塚遠景（南から）

序

松の木遺跡・山神塚は、栃木県央西部、鹿沼市の南東部に位置しています。遺跡は黒川左岸の鹿沼台地上に位置し、周辺には、古くから人々が生活を営んできた痕跡を示す遺跡が数多く存在します。松の木遺跡は、これまで二度の発掘調査により古墳時代の集落跡であることがわかっています。

この度、国道121号線の改良工事に先立ち、路線内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査では、古墳時代中期末から後期の集落の一部を確認したほか、当時の墳墓である方墳も確認することができました。

本報告書は、松の木遺跡・山神塚の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました栃木県県土整備部、鹿沼市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和元年11月

栃木県教育委員会

教育長 荒川 政利

例 言

- 1 本書は、快速で安全な道づくり事業費（補助）一般国道 121 号下石川工区に伴い実施した松の木遺跡・山神塚の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、栃木県教育委員会から公益財団法人とちぎ未来づくり財団が委託を受けて、財団の埋蔵文化財センターが実施した。事業の実施に当たっては、県教育委員会からの指導のもとに行った。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

発掘調査

平成 29(2017)年度 副所長 藤田典夫、調査課 副主幹兼課長 塚本師也、副主幹 後藤信祐
係長 谷中 隆

整理・報告書作成

令和元(2019)年度 副所長 藤田典夫、整理課 副主幹兼課長 津野 仁、嘱託調査員 中三川渉

- 4 本報告書の執筆・編集は中三川が担当し、遺物の実測については津野の協力を得た。土師器・須恵器については整理課副主幹 内山敏行、近世陶磁器については同 池田敏宏、石材については同係長 谷中隆から助言を得た。
- 5 表土除去業務については、有限会社町田建設に委託した。
- 6 基準点測量・杭設置業務については、株式会社ニッコーに委託した。
- 7 航空写真撮影業務については、株式会社シン技術コンサル北関東支店に委託した。
- 8 遺構図面デジタルトレースの一部については、株式会社シン技術コンサル栃木営業所に委託した。
- 9 遺構の写真は現場担当者が撮影し、遺物の写真は、株式会社大塚カラーに委託した。
- 10 本遺跡の発掘調査・整理報告に当たり、下記の方々には御指導・御協力を頂いた。厚く御礼の意を表します。
県土整備部・鹿沼土木事務所・鹿沼市教育委員会
- 11 発掘調査の参加者は次の通りである。
稲葉允子・大屋順之助・岡田真季・荻原秀夫・小野 誠・金子文香・菊地拓真・柴原繁夫・高野エキ
高山文雄・田中伊喜代・野中民子・日賀野豊・福田愛子・増渕敏記・渡邊喜一
- 12 整理作業・報告書作成の参加者は次の通りである。
杉山真理・岩井かほり
- 13 本遺跡の調査概要は、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報で報告されているが、本書を正式報告とする。
- 14 本遺跡の出土遺物・資料類は、栃木県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 遺跡の略称は、鹿沼市松の木遺跡を略したKW-MK、鹿沼市山神塚を略したKW-YGである。
- 2 遺構の略称は、SI：竪穴建物跡、SD：溝跡、SE：井戸跡、SK：土坑、SX：不明遺構、SZ：古墳である。
- 3 全体図の座標は、世界測地系に基づき、図示した方位は座標北である。
- 4 遺構の縮尺は、竪穴建物跡・土坑 1/80、溝跡 1/80・1/100、カマド 1/40 で、スケールを示したので、参照されたい。
- 5 遺物の縮尺は、土師器・須恵器は 1/4 であり、縮尺を図面の脇に示した。
- 6 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンについて、以下の通りである。
硬化赤変部 
- 7 土器実測図の器面調整のうち、ナデは破線、ケズリは実線で示した。
- 8 遺物観察表の色調は、『新版 標準土色帳』農林水産省農林水産技術会議事務局会議監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修 による。
- 9 図版中の遺物番号は挿図中の番号・写真図版中の番号に一致する。

目次

序文	
例言	i
凡例	ii
目次・挿図目次・表目次・図版目次	iii
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 松の木遺跡の調査	12
第1節 調査の概要	12
第2節 発見された遺構と遺物	12
第1項 弥生時代の遺物	13
第2項 古墳時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴建物跡	13
(2) 方形周溝遺構	36
(3) 土坑	38
第3項 古墳時代以降の遺構と遺物	39
(1) 井戸跡	39
(2) 土坑	39
(3) 溝跡	41
(4) その他の遺構	42
第4章 山神塚の調査	47
第1節 調査の概要	48
第2節 発見された遺構と遺物	48
第5章 まとめ	50
(1) 松の木遺跡の時期について	50
(2) カマドと地床炉を持つ建物跡について	52

(3) カマドの形態について	54
(4) まとめ	54
付編	56

挿図目次

第1図	松の木遺跡全体図と調査区	1	第25図	SI-07 出土遺構実測図	32
第2図	松の木遺跡・山神塚グリッド配置図	3	第26図	SI-08 実測図	33
第3図	栃木県地形分類図	6	第27図	SI-08 出土遺物実測図	33
第4図	周辺の遺跡	9	第28図	SI-09 実測図	34
第5図	松の木遺跡 遺構配置図	11	第29図	SI-09 カマド実測図	34
第6図	松の木遺跡 基本土層	12	第30図	SI-09 出土遺物実測図	35
第7図	弥生時代出土遺物実測図	13	第31図	SZ-01 実測図	37
第8図	SI-01 実測図	14	第32図	SZ-01 出土遺物実測図	37
第9図	SI-01 出土遺物実測図	15	第33図	SK-04・09 実測図	38
第10図	SI-02 実測図	17	第34図	SK-09 出土遺物実測図	38
第11図	SI-02 カマド実測図	18	第35図	SE-01, SK-01~03・05~08 実測図	43
第12図	SI-02 (1) 出土遺物実測図	18	第36図	SK-10~13 実測図	44
第13図	SI-02 (2) 出土遺物実測図	19	第37図	SK 出土遺物実測図	44
第14図	SI-03 実測図	21	第38図	SD-01 出土遺物実測図	44
第15図	SI-03 出土遺物実測図	22	第39図	SD-01・05, SX-01・02 実測図	45
第16図	SI-04 実測図	23	第40図	SD-02~04 実測図	46
第17図	SI-04 出土遺物実測図	23	第41図	山神塚・トレンチ配置図	47
第18図	SI-05 実測図	24	第42図	山神塚実測図	49
第19図	SI-05 出土遺物実測図	25	第43図	山神塚出土遺物実測図	49
第20図	SI-06 実測図	27	第44図	昭和57年調査時の松の木遺跡全体図と4号住居址 平面図及び出土遺物	51
第21図	SI-06 カマド実測図	28	第45図	平成12年調査時のSI-01 平面図と出土遺物	51
第22図	SI-06 出土遺物実測図	29	第46図	カマドと枡を持つ建物跡	46
第23図	SI-07 実測図	31			
第24図	SI-07 カマド実測図	32			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	10	第11表	SI-09 出土遺物観察表	36
第2表	弥生時代出土遺物観察表	13	第12表	SZ-01 出土遺物観察表	37
第3表	SI-01 出土遺物観察表	15	第13表	SK-09 出土遺物観察表	39
第4表	SI-02 出土遺物観察表	19	第14表	SK 出土遺物観察表	44
第5表	SI-03 出土遺物観察表	22	第15表	SD 出土遺物観察表	44
第6表	SI-04 出土遺物観察表	23	第16表	山神塚出土遺物観察表	49
第7表	SI-05 出土遺物観察表	25	第17表	東谷・中島地区遺跡群の時期区分と年代	50
第8表	SI-06 出土遺物観察表	30	第18表	栃木県内でカマドと地床枡を持つ遺跡 (古墳時代)	52
第9表	SI-07 出土遺物観察表	32			
第10表	SI-08 出土遺物観察表	33			

図版目次

図版一	松の木道跡・山神塚 南から 松の木道跡・山神塚 上空から	図版九	SI - 03 カマド土層断面 (西から) SI - 03 カマド完掘 (西から) SI - 03 完掘 (南から) SI - 04 遺物出土状況 (北から) SI - 04 完掘 (南西から) SI - 05 遺物出土状況 (南から) SI - 05 カマド左側遺物出土状況 (南から) SI - 05 カマド遺物出土状況 (南から)
図版二	松の木道跡1区 松の木道跡2区	図版一〇	SI - 05 カマド土層断面 (東から) SI - 05 カマド完掘 (支脚あり、南から) SI - 05 カマド支脚 (東から) SI - 05 完掘 (南から) SI - 06 土層断面 (東から) SI - 06 遺物出土状況 (南から) SI - 06 南西柱六部遺物No.1 下位の遺物 (南から) SI - 06 カマド左側遺物出土状況 (南西から)
図版三	松の木道跡3区 山神塚	図版一一	SI - 06 カマド周辺遺物出土状況 (南から) SI - 06 カマド・貯蔵穴周辺遺物出土状況 (南東から) SI - 06 貯蔵穴土層断面 (南から) SI - 06 貯蔵穴完掘 (南から) SI - 06 入口ピット土層断面 (南から) SI - 06 カマド土層断面 (東から) SI - 06 カマド支脚出土状況 (南から) SI - 06 完掘 (南から)
図版四	2区北端テストピットローム土層断面 (南から) 2区作業風景 (北西から) 2区遺構確認状況 (南から) SI - 01 土層断面 (南から) SI - 01 遺物出土状況 (南から) SI - 01 南壁際遺物出土状況 (南から) SI - 01 南壁際遺物出土状況 (北西から) SI - 01 調査風景 (南東から)	図版一二	SI - 07 土層断面 (東から) SI - 07 カマド土層断面 (東から) SI - 07 カマド完掘 (南から) SI - 07 カマド完掘 (南東から) SI - 07 完掘 (南から) SI - 07 完掘 (南から) 2区完掘 (南から) SI - 08 完掘 (南から)
図版五	SI - 01 貯蔵穴土層断面 (南から) SI - 01 貯蔵穴完掘 (南から) SI - 01 カマド土層断面 (西から) SI - 01 カマド完掘 (西から) SI - 01 地床跡 (東から) SI - 01 完掘 (南から) SI - 02 土層断面 (南から) SI - 02 遺物出土状況 (南から)	図版一三	SI - 09 土層断面 (南から) SI - 09 遺物出土状況 (南から) SI - 09 南壁際遺物出土状況 (北西から) SI - 09 カマド遺物出土状況 (南から) SI - 09 カマド土層断面 (南から) SI - 09 完掘 (南から) 1区完掘 (北から) 3区北端 SZ - 01 周辺遺構確認状況 (北から)
図版六	SI - 02 南壁際中央遺物出土状況 (北西から) SI - 02 北カマド右手前のくぼみ完掘 (南から) SI - 02 南西隅粘土出土状況 (北から) SI - 02 貯蔵穴土層断面 (南から) SI - 02 貯蔵穴遺物出土状況 (南から) SI - 02 貯蔵穴完掘 (西から) SI - 02 東カマド土層断面 (南から) SI - 02 東カマド完掘 (西から)	図版一四	SZ - 01 調査状況 (南から) SZ - 01 遺物出土状況 (南から) SZ - 01 東部土層断面及び遺物出土状況 (南から) SZ - 01 拡張後完掘 (北から) SK - 04 土層断面 (東から) SK - 04 遺物出土状況 (南から) SK - 04 完掘 (南から) SK - 09 土層断面 (南から)
図版七	SI - 02 北カマド土層断面 (東から) SI - 02 北カマド土層断面 (南から) SI - 02 北カマド完掘 (南から) SI - 02 北カマド完掘 (支脚なし、南から) SI - 02 北カマド左手前の完掘 (東から) SI - 02 北カマド内支脚完掘 (南東から) SI - 02 入り口付近完掘 (南から) SI - 02 完掘 (南から)		
図版八	SI - 03 土層断面 (東から) SI - 03 遺物出土状況 (南から) SI - 03 柱土確認状況 (北西から) SI - 03 北西部床面炭化世確認状況 (東から) SI - 03 貯蔵穴土層断面 (南から) SI - 03 貯蔵穴完掘 (南から) SI - 03 作業風景 (南から) SI - 03 支脚出土状況 (南西から)		

図版一五

SK - 09 遺物出土状況 (南から)
SK - 09 完掘 (南から)
SK - 02 土層断面 (西から)
SK - 02 遺物出土状況 (南から)
SK - 02 完掘、SK - 03 遺物出土状況 (南西
から)
SK - 03 土層断面 (北から)
SK - 01 完掘、SK - 06・07 土層断面(南から)
SK - 06・07 完掘 (南から)

図版一六

SK - 05 完掘 (南から)
SK - 10・11 土層断面 (南から)
SK - 10・11 完掘 (南から)
3区遺構確認作業風景 (北から)
SK - 08 完掘 (西から)
SK - 12 完掘 (南から)
SK - 13 完掘 (東から)
SE - 01 土層断面 (南から)

図版一七

SE - 01 完掘 (南から)
SD - 01 東半完掘及び土層断面 (東から)
SD - 01 西部完掘 (東から)
SD - 01 完掘、SX - 01・SX - 02 (東から)
SD - 02 ~ 03 (東から)
SD - 02 ~ 04 (北東から)
SD - 05 (南から)
SX - 01 土層断面 (東から)

図版一八

山神塚全景 (調査前・西から)
山神塚現況 (南から)
山神塚封土除去作業風景 (南東から)
山神塚土層断面 (南から)
山神塚中央部土層断面 (南東から)
山神塚及び周辺調査区全景 (調査前・南東か
ら)
山神塚南側試掘トレンチ (南から)
工事完了後の松の木遺跡

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（第1図）

鹿沼市は、栃木県北西部山地と中央部平地が接する部分にあたり、東側を県都宇都宮市と隣接する。江戸時代は日光例幣使街道の宿場町として栄えた歴史ある町で、近代に入ってから木工業を中心とした「木工のまち」として産業が発達してきた。また平成18年には栗野町と合併して新しい鹿沼市が誕生し、県中核都市のひとつとして発展を続けている。

一般国道121号線は山形県米沢市を基点とし、福島県喜多方市及び会津若松市を経て栃木県に至る。県内は日光市から鹿沼市の中心部やや東側をほぼ南北に縦断して壬生町北部で東に折れ、県中部の宇都宮市から真岡市を横断して益子町に至る路線で、県内でも主要な路線のひとつである。今回調査を行なった工区付近は、西側にとちぎ流通センター、北東側に鹿沼工業団地及び東北自動車道鹿沼インターチェンジが近接しているほか、市街地にも近いため通勤等による交通量が多い場所であり、片側1車線で歩道もなく道幅も狭いため、歩道設置の拡幅等による道路改良の必要性が生じていた。

改良工事は、栃木県県土整備部・鹿沼土木事務所が担当し、今回調査を実施する部分の工事は、一部拡幅



第1図 松の木遺跡全体図と調査区

S57年調査 下野考古学研究会 H12年調査 鹿沼市教育委員会

部分と新設部分の切土及び盛土により土地を平坦化することを計画していた。このことを県教育委員会文化財課に照会したところ、この場所には周知の文化財包蔵地である松の木遺跡及び山神塚が所在しており、県教育委員会は遺跡の有無・内容を把握するために確認調査を行うこととなった。

県教育委員会文化財課は平成22年2月に、遺跡の所在調査を実施し、事業地内ではほぼまんべんなく遺物の散布が認められ、特に事業地北半の台地上に遺物が多く散布していることを確認した。平成28年8月に鹿沼土木事務所と埋蔵文化財に関する個別打合せを行い、年度内に確認調査を実施することで調整に入り、同年12月に確認調査を実施した。事業予定地においてトレンチ6本を設定し、遺構・遺物の確認調査を行った。その結果、第1・第3・第4トレンチにおいて竪穴建物跡や溝跡が確認されたため、これらのトレンチ付近の台地部は広範囲に集落跡の遺跡が広がっていると判断された。このため、道路建設事業の実施前に、発掘調査を要することになった。

このような開発計画と確認調査結果を踏まえて、県教育委員会文化財課と県土整備部の協議を経て、平成29年度に現地発掘調査を実施することとなった。6月30日付けで、文化財課長から公益財団法人とちぎ未来づくり財団理事長に松の木遺跡・山神塚発掘調査の費用見積りが依頼された。これを受けて財団理事長から文化財課長に同日費用見積りの回答がなされた。

さらに7月3日付けで、文化財課長から財団理事長に契約締結の依頼文書が送付され、栃木県知事と財団理事長間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が締結された。7月には諸準備を行い、現地における発掘調査は7月から9月に実施することとした。

令和元年度は6月26日付けで、文化財課長から財団理事長に見積依頼があり、8月1日業務委託契約書を締結した。業務は整理作業を行い、これまでの発掘調査結果を報告書として刊行することにした。

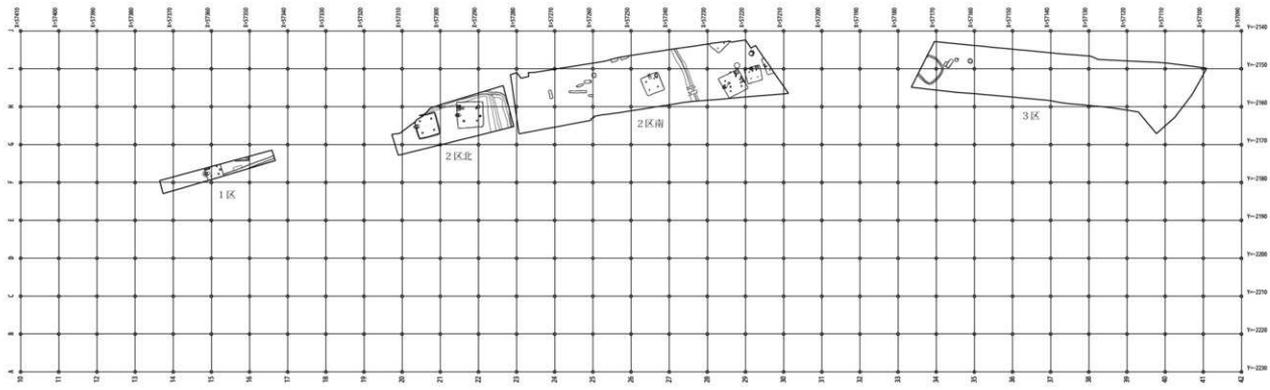
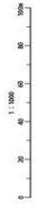
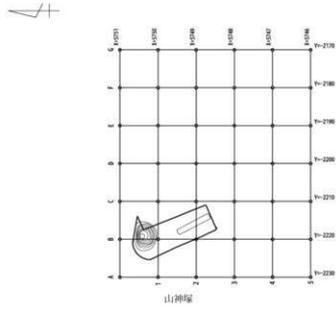
第2節 調査の方法（第2図）

松ノ木遺・山神塚は発掘調査対象面積が2,500㎡で、調査箇所は遺跡西側台地の上面から南西側の低地に向かって緩やかな斜面となっている。調査に際して3箇所の調査区を設定し、北側の国道の拡幅箇所を1区、新設部分については台地の一部が削平されていることから、削平部分北側の台地上面を2区、南側の斜面部分を3区とした。また調査区全体を10m方眼のグリッドを設定し、杭の打設を行った。表土除去は重機によって行い、遺構の確認調査を行った。遺構の精査及び掘削は人力により行い、遺構ごとに平面図、断面図、遺物の出土状況等を図化した。写真撮影は遺構・遺物出土状況・土層等について、デジタルカメラで記録した。さらに、調査終了後には、ドローンによる航空写真撮影を行った。また、2区北側において地山を一部深掘りして、ロームなどの堆積状況を確認した。

山神塚は国道121号線と市道7059線の交差点南東部に位置し、国道の拡幅部分にあたる。除草清掃後、縮尺1/40、10cm等高線の現況図を作成した。土層確認のためのベルトを残し人力による盛土除去作業を実施した。塚南側の拡幅部分は、遺構確認のための試掘トレンチを設置し、重機により表土除去を行った。トレンチ内を精査し遺構及び遺物の確認を行った。

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成29年7月から開始された。7月上旬は、センターにおいて機材等の調達等調査の立ち上げ準備を行った。7日に鹿沼市教育委員会へ発掘調査届及び協力依頼を提出、7日と10日で地元自治会や近隣住民に対する発掘調査実施の周知を行った。松の木遺跡は2区の調査から開始し、13・14日で南半



第2図 松の木遺跡・山神塚 グリッド配置図

部を重機による表土除去を実施した。20日から25日までの遺構確認を行い、遺構配置図を作成するとともに全体写真を撮影した。25日からは、遺構の掘り下げ作業になり、SI-01とSD-01から調査を開始した。9月8日に北側を重機による表土除去を行い、遺構確認作業を実施した。各遺構の調査は9月28日まで続き、SI-06、SD-02・04の調査で終了した。

3区は8月7・9日で表土除去を重機にて実施した。21日と9月1日に遺構確認作業を実施し、4日からSZ-01、SK-10・11・12の調査を開始し、9月27日で終了した。

1区は9月11日に重機による表土除去及び遺構確認作業を実施し、19日からSI-08・09、SD-05の調査を開始し、9月28日に終了した。

山神塚は7月18・19日での除草、清掃作業を行い、27日に現況図（縮尺1/40等高線10cm）を作成した。9月8日から盛土除去作業を開始し、11日にセクション図作成及びセクション図写真撮影を行い、重機による表土除去、試掘調査をしたが、遺構、遺物は確認されなかった。9月27日に平面図の補足作業を行い終了した。

航空写真撮影は、9月29日にドローンにより、デジタル写真撮影を実施した。機材整理、搬出は9月28日から開始し、10月2・3日で遺構精査、図面確認及び補足と重機による埋め戻し作業を行い、10月3日に現場から撤収して、現地における発掘調査を終了した。

整理作業は、令和元年8月当初から実施した。作業は、取り上げてきた遺物の洗浄、接合から始まり、注記して、出土位置を記録した。各遺構から代表的な遺物を選定して実測・トレース・図版作成を行った。遺構は、デジタルトレースして図版を作成し、9月から原稿作成を行った。遺構図面の一部は、委託により第2原図を作成し、報告書掲載用遺物写真撮影も委託により行った。その後、遺構図・遺物図と文章などを編集して入稿、校正して、報告書刊行の運びとなった。さらに、遺物や記録類の収納作業を行って、本遺跡整理・報告書刊行作業が終了した。



第1節 地理的環境 (第3図)

栃木県は、関東地方の北部中央に位置し、西から北にかけて足尾・日光・那須など比較的標高の高い山々が連なり、東側は八溝山地と呼ばれる低い山地が延びている。一方中央部は、これらの山地を水源とした鬼怒川、那珂川、渡良瀬川をはじめとする大小河川が南流する平地となっている。その南部は、宝積寺・田原・宝木段丘が形成されて、洪積台地と沖積低地が入り組んだ複雑な地形となっている。

本遺跡がある鹿沼市下石川は、このような洪積台地のひとつである鹿沼台地のほぼ中央部に所在する。鹿沼台地は、日光市鳴虫山付近を水源とする黒川と宇都宮市飯田町付近を水源とする姿川との間にあり、今市扇状地南端の鹿沼市東部から壬生町北部に至る南北に延びる広大な台地である。また、本台地は上欠面（最上位面）、鹿沼面（上位面）、宝木面（中位面）の3つの段丘面で構成されており、台地内は両河川の支流によって樹枝状に開析され、これらの谷に面した台地上には、多くの遺跡が点在している。

第2節 歴史的環境 (第4図、第1表)

松の木遺跡周辺地域でも数多くの遺跡が確認されていることから、鹿沼市内の代表的な遺跡について概観する。

旧石器時代 7遺跡が確認されており、稲荷塚遺跡（3）、鹿沼流通業務団地内遺跡（5）、坂田北遺跡（23）の3遺跡について発掘調査が行われている。稲荷塚遺跡はユニットと礫群が1箇所ずつ確認され、ナイフ形石器、削器、搔器、彫器、石核、剥片、磨石など計117点の遺物が出土している。鹿沼流通業務団地内遺跡は、ナイフ形石器が出土している。坂田北遺跡は、細石核、細石刃、楔形石器、剥片など計577点の遺物が出土している。

縄文時代 186遺跡が確認されており、これは県内他地域と同様に、他の時代を圧倒する遺跡数といえる。

草創期の遺跡は鹿沼流通業務団地内遺跡1箇所、爪形土器や尖頭器が出土している。

早期から前期の遺跡は、市西部の丘陵上及び市南部の藤江町から下石川にかけての大きく二つの集中地区がうかがえる。鹿沼流通業務団地内遺跡、坂田遺跡（22）等が代表的な遺跡である。坂田遺跡は、早期子母口式期と前期黒浜式期の竪穴建物跡が確認されている。

前期では、鹿沼台地一帯に広く分布するなど、遺跡が広域に拡散する傾向がある。三軒屋遺跡（13）や稲荷塚遺跡では、黒浜式期の竪穴建物跡が、鹿沼流通業務団地内遺跡では諸磯式期、浮島式期及び興津式期の竪穴住居跡が確認されている。

中期から後期後半にかけては、116箇所の遺跡が分布する。この時期は、各地に大規模な拠点集落が営まれる時期である。鹿島神社裏遺跡（24）は、前期黒浜式期の竪穴建物跡1軒と、中期の加曾利EⅡ～Ⅲ式期及び阿玉台式期の竪穴建物跡2軒、中期前半から中葉にかけての袋状土坑を9基確認している。明神前遺跡（18）は、中期後葉～後期前葉（加曾利EⅠ式期、加曾利EⅢ式期、称名寺式期、堀之内式期）の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、配石遺構のほか、水場遺構からは木組遺構やこれに連結する排水溝跡、石敷き等が確認されている。

後期後半から晩期にかけては、11箇所の遺跡が確認されており極端に減少する。坂田遺跡では、晩期末の大洞A式段階の土器が出土している。

弥生時代 42遺跡が確認されており、発掘調査されたのは、大野原遺跡（6）、稲荷塚遺跡、鹿沼流通業務団地内遺跡、茂呂川西遺跡（15）、藤木遺跡（20）、津村遺跡（21）の7遺跡である。特徴としてほとんどが中期に属する遺跡で、市内において後期に属する遺跡が確認されていないことがあげられる。大野原遺跡は、

中期後半の竪穴住居跡が2軒確認されている。稲荷塚遺跡では、ほぼ完形の甕型土器と紡錘車が出土している。鹿沼流通業務団地内遺跡では、中期後半の竪穴建物跡が3軒確認されている。土坑は2基が確認されたが、1基は中期中頃の再送墓である。津村遺跡では、中期後半の竪穴建物跡1軒と前期後葉～中期前葉の土坑1基が確認されている。

古墳時代 48遺跡と26の古墳及び古墳群が確認されているが、発掘調査がされたものは、稲荷塚1号・2号墳(4)、狼塚古墳(14)、段ノ浦古墳群(19)、三軒屋遺跡、大野原遺跡、稲荷塚遺跡、鹿沼流通業務団地内遺跡、松の木遺跡(1)、明神前遺跡、西山遺跡(7)、宝龍内遺跡(17)、下台原南遺跡(12)、竜地遺跡(16)がある。

前期に属する遺跡としては、野沢北原遺跡で壺、器台、高坏の破片が採集されているが、前期古墳は今のところ確認されていない。

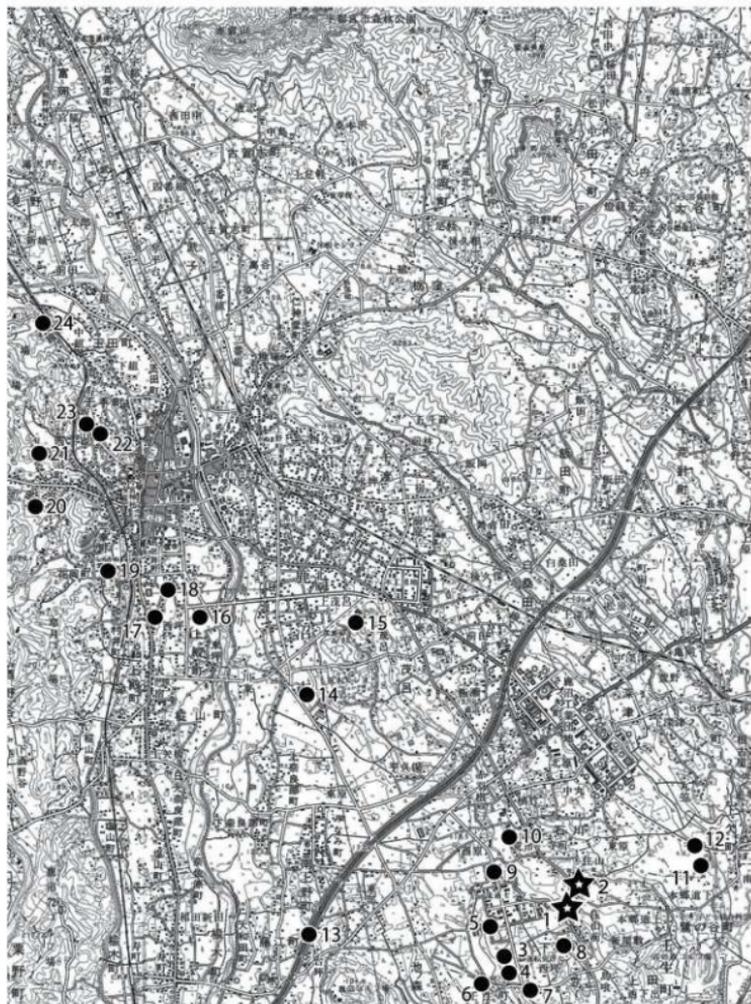
中期になると、三軒屋遺跡、稲荷塚遺跡、鹿沼流通業務団地内遺跡、明神前遺跡、松の木遺跡、竜地遺跡で竪穴建物跡が確認されている。

後期になると、稲荷塚遺跡、鹿沼流通業務団地内遺跡、明神前遺跡、西山遺跡、松の木遺跡、竜地遺跡で後期の竪穴住居跡が確認されている。古墳では藤江東原古墳群の2号墳の主体部が箱式石棺であり、5世紀代までさかのぼる可能性がある。発掘調査された古墳としては、稲荷塚1号墳は直径約24mの円墳で、木簡直葬の竪穴式の土壌の埋葬施設で、6世紀中頃の築造と考えられる。稲荷塚2号墳は直径約18～19mの円墳で、木簡直葬の竪穴式の土壌の埋葬施設を持つ。段ノ浦古墳群第3号墳は墳丘長19.0mで、河原石小口積みの横穴式石室を持つ。狼塚古墳は全長31.8mの基壇を持つ前方後円墳で、河原石小口積みの横穴式石室を持ち、馬具、直刀、鉄族、刀子、玉類、銅製の豊富な副葬品や、墳丘からも円筒埴輪や形象埴輪が多数出土している。いずれも6世紀後半から7世紀代の築造と考えられる。その他未調査ではあるが、現存の墳丘長で約60mを測る判官塚古墳群第1号墳や市内で最大の全長約73mを測る下台原古墳群第12号墳(11)といった大型の前方後円墳が存在する。いずれも円筒埴輪を有しており、6世紀後半の築造と考えられる。また、松の木遺跡に関係する古墳として、川入古墳群(8)、上石川大塚古墳群(9)があげられる。川入古墳群は、松の木遺跡の南側の谷を挟んだ台地上にあり、16基のうち9基が現存しており、いずれも円墳である。未調査であるが、円筒埴輪が出土しており、松の木遺跡でも同古墳群の埴輪片が採集されている。上石川大塚古墳群は、鹿沼流通業務団地内遺跡の北側に接しており、同遺跡の調査の際に9基の古墳の測量及び第1号墳の前方部の一部を発掘調査している。第1号墳は墳丘長約28.8mの前方後円墳で、前方部に盗掘坑があり河原石が散乱していることから、横穴式石室を持つ古墳であることが確認されている。上石川・下石川地区では唯一の前方後円墳のため、この地域の盟主的な有力者の墓と考えられている。

歴史時代 確認されている奈良・平安時代の遺跡数は約146遺跡である。ただし、市の北西部が山間部で農耕に適さない土地であったことから、遺跡の規模そのものは小さく、河内郡内で見られるような数百軒規模のムラは存在しなかったと考えられる。ただし、市内東半部においては、古墳時代から連続して小規模なムラが形成されていたと考えられる。これまで発掘調査された鹿沼流通業務団地内遺跡、稲荷塚遺跡、竜地遺跡、津村遺跡で確認された竪穴建物跡は、竜地遺跡で奈良時代のものが若干確認されているものの、その他の遺跡では平安時代の遺構であることが特徴である。

中世の遺跡としては、鹿沼流通業務団地内遺跡で15～16世紀頃の地下式墳、方形竪穴、墓坑等が確認されている。上石川地内には宇都宮氏に仕えた石川氏の館跡の可能性のある上石川堀ノ内館跡(10)があり、同遺跡の中世遺構との関連が指摘されている。また、中世の山城である独鈷山城の発掘調査がされており、

掘立柱建物跡、堀切遺構、帯曲輪遺構、柵列等の遺構が確認されている。その他、茂呂城跡から出土したと伝えられる備前銭として埋納されたと考えられる古銭 3,015 枚がある。



国土地理院発行「宇都宮」「鹿沼」(1:50,000)を改変

第4図 周辺の遺跡

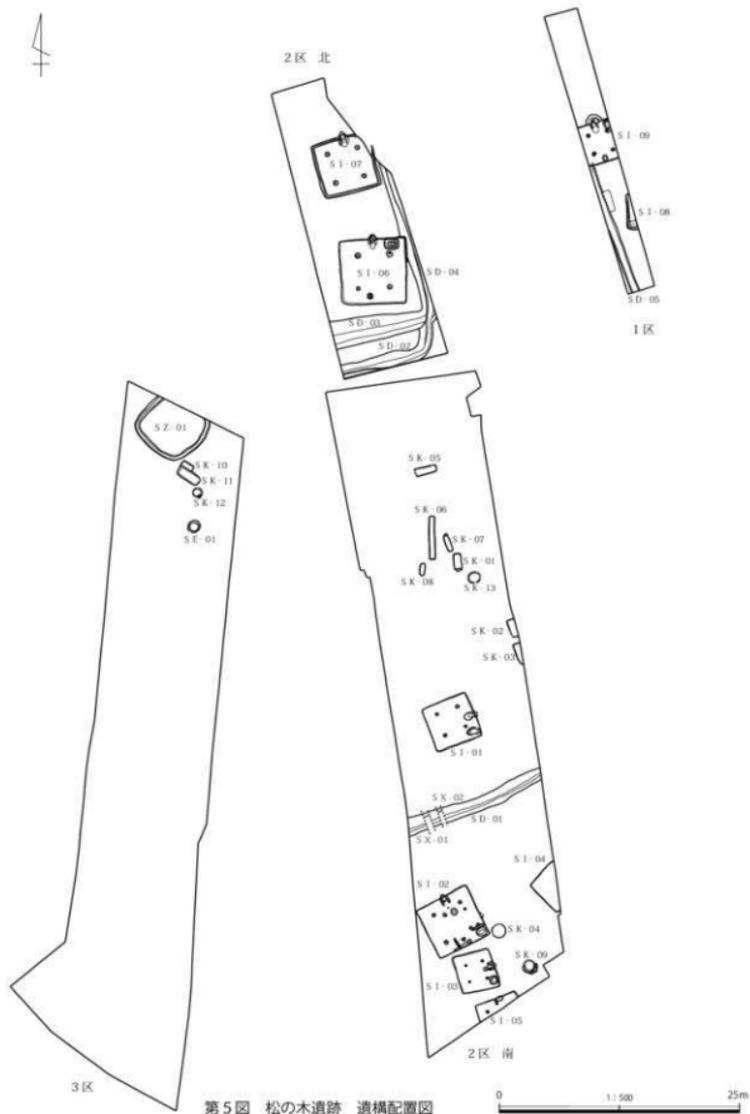
第2章 遺跡の環境

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
1	松の木遺跡	鹿沼市上石川松ノ木	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	昭和57年調査。主要地1997『松の木遺跡』下野考古学研究会平成12年調査。永岡2005『市内遺跡発掘調査報告書1』鹿沼市教育委員会
2	山神塚	鹿沼市上石川山神	塚	近世?	1965『鹿沼市遺跡分布地図』鹿沼市教育委員会
3	稲荷塚遺跡	鹿沼市下石川稲荷塚	集落跡	旧石器・縄文・弥生	昭和59年調査。藤田他1987『稲荷塚・大野原』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
4	稲荷塚1号・2号墳	鹿沼市下石川稲荷塚	古墳	古墳	昭和59年調査。藤田他1987『稲荷塚・大野原』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
5	鹿沼流通業務団地内遺跡	鹿沼市流通センター	集落跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	昭和59～62年調査。初山他1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
6	大野原遺跡	鹿沼市下石川大野原	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和59年調査。藤田他1987『稲荷塚・大野原』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
7	西山遺跡	鹿沼市下石川北浦	集落跡	縄文・古墳	平成8年調査。池田他1998『西山遺跡』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
8	川入古墳群	鹿沼市下石川川入	古墳	古墳	16基中9基現存。半調査。塚輪探検
9	上石川大塚古墳群	鹿沼市上石川和田	古墳	古墳	9基調査調査(2基消滅)。初山他1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団 幸徳会館では、和田山古墳群として掲載
10	上石川壠ノ内館跡	鹿沼市上石川壠ノ内	城館跡	中世	1965『鹿沼市遺跡分布地図』鹿沼市教育委員会 初山他1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
11	下台原古墳群	鹿沼市関津下台原	古墳	古墳	19基。12号墳調査調査(下野考古学研究会) 山越他1995『柿の内遺跡 下台原遺跡』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
12	下台原南遺跡	鹿沼市関津下台原	集落跡	縄文・古墳	平成5年調査。山越他1995『柿の内遺跡 下台原南遺跡』、栃木県教育委員会(財)栃木県文化振興事業団
13	三野原遺跡	鹿沼市南上野町小林	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和44年調査。宮已他1972『東北自動車線新橋津織文化財発掘調査報告書』、栃木県教育委員会
14	狐塚古墳	鹿沼市茂呂西茂呂	古墳	古墳	昭和40・41年調査。大和久1966『狐塚古墳発掘調査報告書』、鹿沼市教育委員会
15	茂呂川西遺跡	鹿沼市茂呂北野	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安	昭和41年調査
16	竜池遺跡	鹿沼市上殿町竜池	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安	平成12年調査。中山他2001『竜池遺跡』、栃木県教育委員会(財)とちぎ生涯学習文化財団
17	宝籠内遺跡	鹿沼市上殿町宝籠内	包蔵地	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世	平成8年調査。栃木県教育委員会1998『栃木県縄文文化財保護行政年報20平成8年度(1998)』
18	明神前遺跡	鹿沼市上殿町明神前	包蔵地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世	永岡2002『明神前遺跡発掘調査報告書』、鹿沼市教育委員会 青木2004・福山他2006『明神前遺跡』、鹿沼市教育委員会
19	段ノ原古墳群	鹿沼市村井町段ノ原 他	古墳	古墳	16基。平成9・10年調査。栃木県教育委員会1999・2000『栃木県縄文文化財保護行政年報20平成9年度(1997)』、『2012平成10年度(1998)』
20	藤木遺跡	鹿沼市日吉町藤木	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安	昭和44年調査
21	津村遺跡	鹿沼市日吉町津村	集落跡	縄文・奈良・平安・近世	平成12年調査。永岡2005『津村遺跡』、鹿沼市教育委員会
22	坂田遺跡	鹿沼市坂田山坂田	包蔵地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	昭和51年調査。消滅
23	坂田北遺跡	鹿沼市坂田山坂田	集落跡	旧石器・縄文	昭和51年調査。消滅
24	鹿島神社裏遺跡	鹿沼市玉田町宮内	集落跡	縄文・奈良・平安・中世	昭和46・48年調査。鳩越1974『鹿島神社裏遺跡』、鹿沼市教育委員会 下野センター一機調査

参考文献

- 初山孝行ほか 1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』、栃木県教育委員会
- 鹿沼市教育委員会生涯学習課 1995『鹿沼市遺跡分布地図』、鹿沼市教育委員会
- 山越 茂ほか 1995『柿の内遺跡 下台原南遺跡』、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 名取昌昭ほか 1997『松の木遺跡』、『下野考古学25』下野考古学研究会
- 池田敏宏ほか 1998『西山遺跡』、栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 中山 晋ほか 2001『竜池遺跡』、栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 鹿沼市史編さん委員会 2001『鹿沼市史 資料編 考古』、鹿沼市
- 鹿沼市史編さん委員会 2004『鹿沼市史 通史編 原始・古代・中世』、鹿沼市
- 永岡弘章 2005『津村遺跡』、鹿沼市教育委員会
- 永岡弘章 2007『鹿沼市内遺跡発掘調査報告書1』、鹿沼市教育委員会



第3章 松の木遺跡の調査

第1節 調査の概要（第5・6図）

松の木遺跡は、鹿沼市の南東部、とちぎ流通センターの東側に位置する。黒川の支流が形成した支谷により東西を挟まれた宝木面に立地しており、その範囲は東西約620m、南北約520mにおよぶ。今回の調査地点は、遺跡の中心から西よりの台地の上面から南西斜面にあたり、台地上面の標高は約107m、水田となっている開析低地との比高は約7mで、台地正面から低地へは、緩やかな斜面となっている。

本遺跡は、民間開発等に伴い過去に2回発掘調査が行われている。昭和57年の調査は下野考古学研究会によって実施され、古墳時代中期から後期の竪穴建物跡5件、土坑3基等が確認された。土師器等の遺物が多数出土しているほか、旧石器時代の石器や縄文時代早期及び後期の土器片等も採集されたことが報告されている。（第44図）平成12年の調査は鹿沼市教育委員会によって実施され、古墳時代中期の竪穴建物跡1件が確認されている。（第45図）

今回の調査では、竪穴建物跡9軒、土坑13基、溝跡4条、井戸跡1基、方形周溝遺構1基が発見された。竪穴建物跡は古墳時代中期から後期、方形周溝遺構は古墳時代中期の方墳と見られる。土坑は、古墳時代中期や近世のものと思われるものもあるが、時期不明のものが多い。井戸跡と溝跡は時期不明で、溝跡については覆土の状況などから近世以降の可能性がある。各遺構の多くが、ゴボウ耕作によるトレンチャーによって攪乱が著しく、遺構の遺存状態は良くない。

竪穴建物跡は、古墳時代中期末葉から後期初頭の4件が台地縁辺部に、そこから約10m離れた箇所で後期前葉の1件が、そこからさらに約40m離れた箇所の台地平坦面に古墳時代後期後葉の4件が位置しており、分布域が異なる。後期前葉と後葉の建物跡の間には、古墳時代の遺構は存在せず空白地帯となっている。また、重複する建物跡は見られないが、台地縁辺部5棟の内4棟は隣接しており、同時に建てられていたものではない。古墳時代中期末葉から後期初頭の建物跡は一辺4～5mの方形で、東ないし北壁にカマドが作り付けられているが、東壁から北壁に作り替えられた例や、カマドとともに炉を持つ建物跡も2件見られる。

古墳時代後期中葉の建物跡は一辺4～5mのものが2件と、一辺6～7mのものが2件ある。全堀した大型の2件は、ともに4本の主柱穴とカマドと貯蔵穴を持つ。

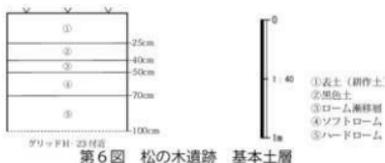
土坑は古墳時代中期末葉から後期初頭の貯蔵穴と考えられる円筒形土坑と、近世墓と考えられる長方形の土坑と、時期不明の土坑がある。

出土した遺物は、土師器、須恵器、陶器、かわらけ、石器などである。土器類は、完形品は殆ど見られず破片が多い。トレンチャーによる攪乱も影響しているものと考えられる。

遺跡の基本層序は、調査区2区南の北端、H23グリッド地点で、表土から1mの地点まで掘り下げて確認した。①表土・耕作土が約25cm、②黒色土が約15cm、③ローム漸移層が約10cm、④ソフトローム層が約20cmで⑤ハードローム層に達する。

第2節 発見された遺構と遺物

本遺跡の調査で、弥生時代の遺物、古墳時代の竪穴住居跡と土坑、方形周溝遺構、遺物、近世以降の溝、土坑、



第6図 松の木遺跡 基本土層

遺物が確認されたので報告する。

第1項 弥生時代の遺物（第7図、第2表、図版十九）

弥生時代の遺構は確認されなかったが、古墳時代の建物跡SI-09の覆土中から、弥生時代の土器が1点出土した。横位の沈線下に竹管状の工具による2段の刺突が施されている。弥生時代中期後半、壺の頸部の一部と考えられる。



第7図 弥生時代出土遺物実測図

第2表 弥生時代出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm×g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	壺	口径:— 底径:— 器高:—	内:ナデカ、 外:横位の沈線下に竹管状の刺突を2段に施す	良好。黒色細粒少量、灰色粒や少ない。	良好	内外:10YR7/4 にぶい黄褐色	頸部一部	SI-09 東

第2項 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

SI-01（第8・9図、第3表、図版五・十九）

2区南、中央よりやや南よりのH26グリッド内に位置する。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は東西5.20m、南北4.95mのほぼ正方形を呈する。南北方向の主軸はN-21°-Wである。確認面から床面までの深さは北側と西側で約40cm、南側と東側で約47cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面はほぼ平坦で締まっており、薄く貼床が施されている。特にカマドの北側周辺と南側の柱穴間が硬化している。周溝は確認されなかった。床面からは、主柱穴4基を確認した。規模は南西側が床面の直径34cm、底面17cm、深さ73cm、南東側が直径29cm、深さ72cm、北西側が直径30cm、深さ69cm、北東側が直径35cm、深さ67cmを測る。

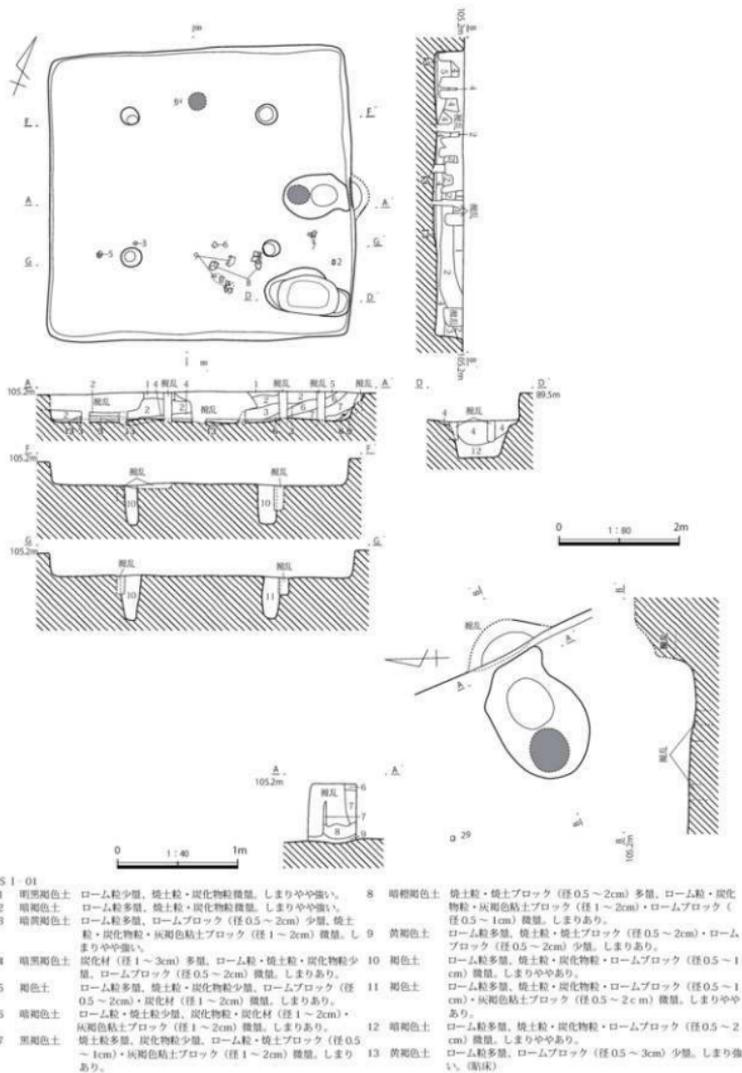
南東部コーナーで貯蔵穴を確認した。平面形は1.0m×0.52mの隅丸長方形を呈し、深さ62cmで周囲に浅い掘り込みを持つ。

カマドは、東壁のほぼ中央部にある。袖や天井は確認できなかったため、意図的に壊された可能性がある。煙道は壁の上面を約80cmの幅で斜めに削り外側へ張り出すが、攪乱のため全体は不明である。煙道の全面の床が1.1m×0.74mの大きさで楕円形状にわずかに凹んでおり、焚口と燃焼部に相当するものと考えられる。焚口部北寄りに直径約35cmの硬化赤変箇所が見られる。燃焼部東壁と見られる住居の壁が、幅50cm程にわたり硬化赤変していた。

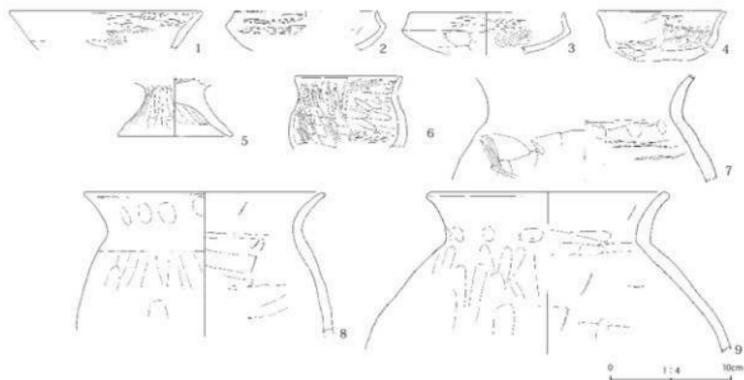
北壁中央部から約70cm離れた所に硬化赤変箇所が見られた。東半分がトレンチャーにより壊されていたが、直径約30cmの円形になるものと推察される。中央部が窪むことから、地床炉の可能性もある。

覆土は、攪乱が著しいが、自然堆積によることが観察できる。

遺物は土師器が出土しているが、破片が多く完形のものはない。特に貯蔵穴から南側柱穴間の床面硬化部分において裏の破片が集中して出土している。図示したものは、9点である。1～4は坏で、1は貯蔵穴の覆土中から出土しており、内外面とも赤彩されている。3は南西柱穴付近の床面から出土しており、内外面漆仕上げされている。6の小型壺と8・9の裏は南側柱穴の床面硬化部分で、7の裏は貯蔵穴とカマドの間の床硬化面から出土している。



第8図 SI-01 実測図



第9図 SI-01 出土遺物実測図

第3表 SI-01 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(m×φ)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径:(15.8) 底径:— 器高:—	内:口縁部横方向ミガキ、底部縦方向ミガキ 外:口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内外面赤褐色	良好、白色微粒少量	良好	内外:10B5/6赤	口縁部1/4 底部一部	野竈穴 覆土
2	土師器 杯	口径:(11.8) 底径:— 器高:—	内:底部縦方向ミガキ 外:口縁部から底部上面横方向ミガキ、底部ヘラケズリ、黒底あり	やや粗い、褐色微粒・白色粒多量	やや良好	内外:5B4/1褐灰白	口縁部1/4 底部1/4	No. 1
3	土師器 杯	口径:(12.8) 底径:— 器高:—	内:口縁部ヨコナデ後横方向ミガキ、底部放射状ミガキ 外:口縁部ヨコナデ後横方向ミガキ、底部ラケズリ内外面全面漆仕上げ	良好、白色微粒微量	良好	内外:7.5YR3/1黒褐	口縁部1/6 底部部1/6	No. 13
4	土師器 杯	口径:(10.8) 底径:— 器高:—4.3	内:口縁部ヨコナデ、底部放射状の粗いミガキ 外:口縁部ヨコナデ後粗いミガキ、底部ヘラケズリ後粗いミガキ、底部に木炭痕あり	やや良好、白色微粒少量、透明粒微量	良好	内外:10YR6/3にぶい黄橙	口縁部一部 底部1/2	カマド 周辺表面
5	土師器 高杯	口径:— 脚径:(9.4) 器高:—	脚部内:花弁状のナデ、脚部横ナデ 脚部内面ミガキ 脚部外:ヘラケズリ	良好、白色微粒少量	良好	内外:2.5YR5/6明赤褐	脚部径1/3	No. 15
6	土師器 小型壺	口径:(8.8) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナデ後横方向ミガキ、体部横ナデ後下段横方向ミガキ 外:口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ後縦方向ミガキ	良好、白色微粒やや多量、褐色粒少量	良好	内外:7.5YR6/4にぶい黄	口縁部1/4 体部上へ中位1/4	No. 7
7	土師器 甕	口径:(19.6) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナデ、頸部押圧痕あり、胴部ヘラケズリ 外:口縁部横ナデ、押圧痕あり、胴部ヘラケズリ	やや粗い、白色微粒・黒色微粒・灰色微粒少量、白色粒やや多量	やや良好	内外:7.5YR7/3にぶい黄橙	口縁部1/6 胴部上位1/6	No. 35
8	土師器 甕	口径:(20.0) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナデ、胴部ナデ 外:口縁部横ナデ、押圧痕あり、胴部ヘラケズリ	やや良好、白色微粒・黒色微粒少量、褐色粒・白色微粒やや多量	良好	内:5YR3/3黒褐 外:2.5YR3/3明赤褐	口縁部1/4 胴上位1/4	No. 49 ・51
9	土師器 甕	口径:(18.0) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ、粘土接合痕あり 外:口縁部横ナデ、頸部押圧痕あり、胴部ヘラナデ	やや粗い、白色微粒・黒色微粒やや多量、褐色粒少量	良好	内:5YR5/4にぶい赤褐 外:10YR6/4にぶい黄橙	口縁部1/2 胴上位1/3	No. 48 ・55

SI-02 (第10～13図、第4表、図版五・六・七・十九・二〇)

区南、南側のH28グリッドに位置し、南西コーナーの一部がH29グリッドに入る。南側にSI-03が隣接する。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は東西5.86m、南北5.75mのほぼ正方形を呈する。南北方向の主軸はN-20°-Wである。確認面から床面までの深さは西側が31～32cm、北東部が40cm、南東部が51cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

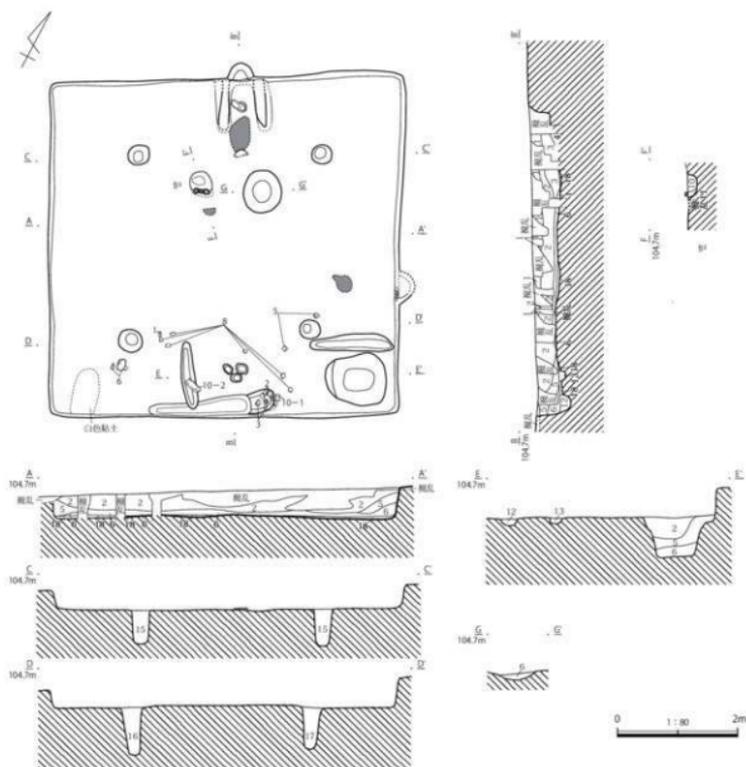
床面はほぼ平坦で、部分的に薄い貼床が施されている。周溝は確認されなかったが、南壁中央部に、壁に沿って溝状の掘り込みが見られる。規模は東西2.10m、幅は、東端部で36cm、深さ3cm、西に40cmのところまで深さが18cmと落ち込み、西端部で幅20cm、深さ8cmを測り、西から東へ向かって広がる形状を呈する。

また、間仕切り溝が2条掘られている。場所は南壁の掘り込みから北へ垂直に伸びるもので、長さが1.15m、深さ11cm、もう一つは南東角の貯蔵穴北側で、東壁から西へ長さ1.37m、深さは両端が13～14cm、中央部が22cmを測る。柱穴は主柱穴4基と、入口ピットと考えられる3基の柱穴を確認した。主柱穴は、南西側が床面直径38cm、底面18cm、深さ80cm、南東側が床面直径30cm、底面20cm、深さ71cm、北西側が床面直径30cm、底面20cm、深さ57cm、北東側が床面直径30cm、底面18cm、深さ64cmとなっている。入口ピットの新旧関係は不明である。また、南西部コーナーで長さ約1m、幅約40cmの範囲で白色粘土の堆積が見られた。

南東部コーナーで貯蔵穴を確認した。平面形は1.03m×0.91mの隅丸方形を呈し、深さ56～64cmを測る。カマドは東壁中央部からやや南寄り、北壁のほぼ中央部の2箇所にあるが、東カマドは袖や天井部が撤去されていることから、北カマドへと付け替えられたものと考えられる。東カマドはSI-01で見られたような凹みもないため、大きさは不明である。煙道は、南側の一部以外が攪乱を受けており全体は不明であるが、壁上面を60cmの幅で斜めに削り外側へ張り出すものと考えられる。攪乱を逃れた燃焼部奥壁にあたる建物の壁の一部と焚口付近とみられる床の一部に硬化赤変が見られる。北カマドは一部攪乱を受けていたが、両袖、煙道、支脚に転用された土師器裏が残っていた。袖は暗灰褐色粘土で作られており、焼土を含んでいることから東カマドで使用されていた粘土を再利用したものと考えられる。両袖とも壁から直線状に延び、先端部は攪乱のため不明瞭であるが、長さは約90cmになると思われる。横幅は90cmを測り、建物内ではほぼ方形を呈す。煙道は、壁の中段を45cmの幅で斜めに半円錐状に削り、外側へは約30cm張り出す。焚口の手前が全体的に浅く凹んでおり、凹みを中心として西に向かって床が硬化している。凹みの中心から焚口は、硬化赤変している。住居中央部からやや北寄り、北カマド西袖から70cmほど離れた場所から、地床炉が確認された。約40cm×30cm、深さ18cmのややいびつな楕円形を呈し、南側に礎を3個並べている。その南端部に一部攪乱を受けた直径約20cmの硬化赤変部分が見られる。また、炉のすぐ北側にも38cm×31cmの円形凹みがあるが、廃棄された炉かどうかは判断がつかなかった。

覆土は攪乱が著しいが、第2層が厚く堆積している状況がうかがえ、人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物は土師器と須恵器が出土しているが、完形のものはない。南側入口の壁付近から貯蔵穴にかけて、破片が特に多く出土している。図示したものは、9点である。1～3は土師器環で、1は南西柱穴付近の床面から、2は貯蔵穴の覆土中から、3は南側壁の溝状落ち込みから出土している。1・3は外面ヘラケズリ、内面ミガキ、2は内外面ともミガキ調整されている。4は手握ね土器でカマド周辺の床面直上から出土している。6の土師器裏は南西柱穴付近の床面から出土している。外面はミガキ調整でスガが付着しており、内面は剥離が著しい。7の土師器裏はカマド内から倒立した状態で出土しており、支脚に転用されたものである。10は、全面が焼けていることから支脚と考えられる石製品で、南壁入口付近から出土している。10-1と10-2はやや離れた位置から出土したが、同じ砂岩製で本来は1個体で接合し、直方体状に加工されている。10-1は、表裏面が平らに加工され、片面に金属製品を研磨したような使用痕が残っており、砥石として使用された形跡がある。両側面は凹んでいる。10-2は、表裏面は平らに加工され、片面の端部は斜めに削り断面は楔状となる。右側も平らに加工されている。

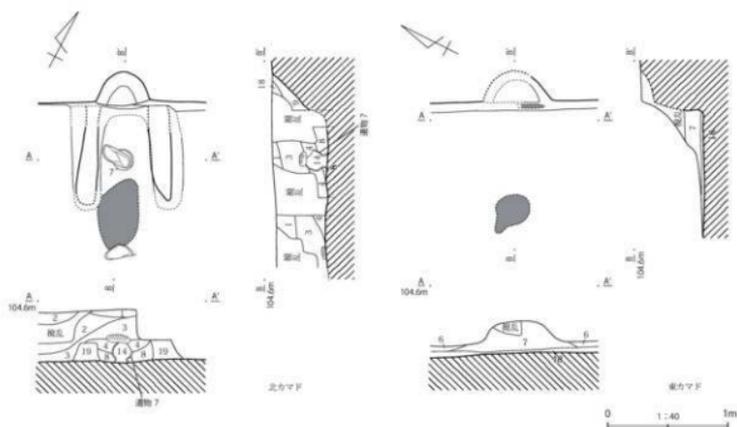


S1-02

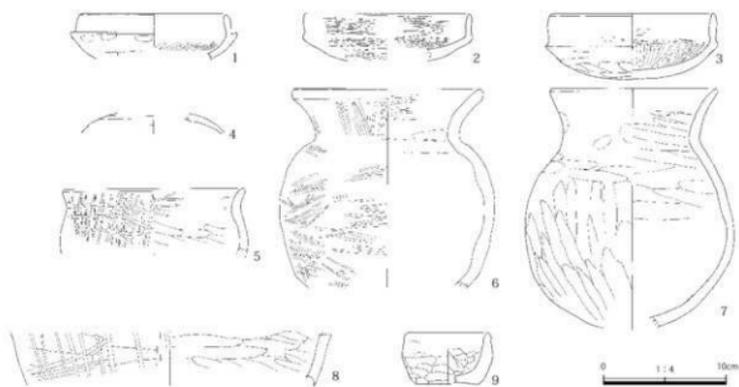
- 1 黒褐色土 ローム粒微量。しまりあり。
 2 暗褐色土 ローム粒多量。炭化物粒・焼土粒微量。しまりあり。
 3 褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。炭化物粒・明褐色粘土粒・焼土ブロック (径0.5cm) 微量。しまりあり。
 4 暗褐色土 焼土粒多量。焼土ブロック (径0.5~2cm)・明褐色粘土粒少量。ローム粒・炭化物粒微量。しまりあり。
 5 暗黒褐色土 ローム粒少量。炭化物粒・焼土粒・ロームブロック (径0.5~1cm) 微量。しまりあり。
 6 明褐色土 ローム粒多量。炭化物粒・焼土粒・ロームブロック (径0.5~2cm) 微量。しまりあり。
 7 暗黄褐色土 ローム粒多量。炭化物粒・焼土粒・明褐色粘土粒少量。ロームブロック (径0.5~1cm)・明褐色粘土ブロック (径0.5~1cm) 微量。しまりややあり。
 8 暗褐色土 焼土粒多量。焼土ブロック (径0.5~2cm) 少量。ローム粒・炭化物粒・ロームブロック (径0.5~2cm) 少量。明褐色粘土粒・明褐色粘土ブロック (径0.5~1cm) 微量。しまりあり。
 9 黄褐色土 ローム粒多量。炭化物粒・焼土粒・ロームブロック (径0.5~2cm) 少量。焼土ブロック (径0.5~1cm) 少量。しまりあり。
 10 暗褐色土 焼土粒多量。ローム粒少量。炭化物粒・ロームブロック (径0.5~1cm)・焼土ブロック (径0.5~1cm) 微量。しまりややあり。

- 11 褐色土 ローム粒多量。焼土粒・ロームブロック (径0.5~1cm)・焼土ブロック (径約0.5cm) 微量。しまりあり。
 12 黄褐色土 ローム粒多量。炭化物粒・焼土粒・ロームブロック (径0.5~3cm) 微量。しまりあり。
 13 明黒褐色土 ローム粒少量。炭化物粒・焼土粒・ロームブロック (径0.5~3cm) 微量。しまりあり。
 14 暗黄褐色土 ローム粒多量。焼土粒・ロームブロック (径0.5~3cm) 少量。炭化物粒微量。しまりあり。
 15 暗黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (径0.5~1cm) 微量。しまりややあり。
 16 暗褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (径0.5~2cm) 少量。しまりややあり。
 17 暗褐色土 ローム粒多量。焼土粒・ロームブロック (径0.5~2cm) 微量。しまりややあり。
 18 黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック (径1~4cm) 少量。しまり強い。(陥床)
 19 暗灰褐色土 明褐色粘土粒多量。明褐色粘土ブロック (径1~3cm)・焼土ブロック (径0.5~1cm) 少量。ローム粒・焼土粒・ロームブロック (径0.5~1cm) 微量。しまりあり。(カマド跡)

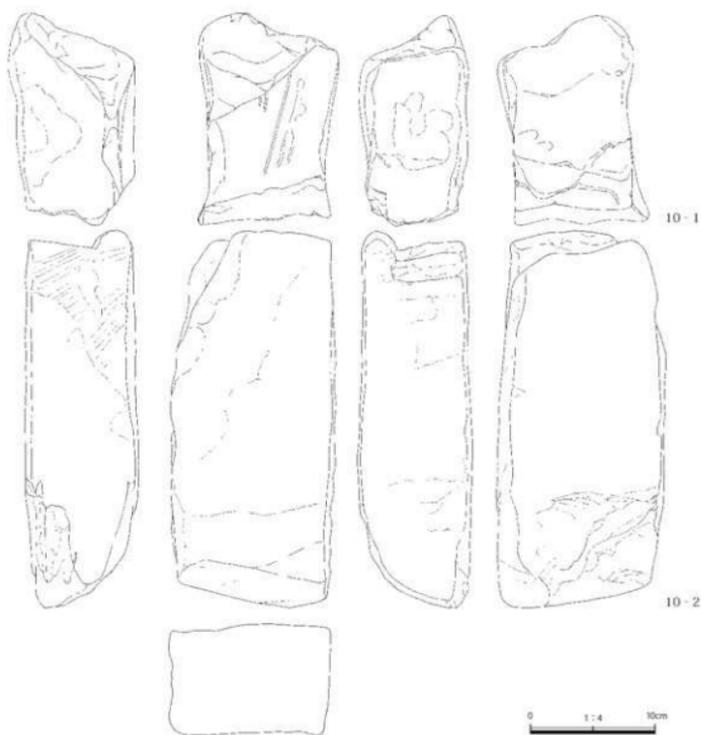
第10図 S1-02 実測図



第11図 SI-02カマド実測図



第12図 SI-02(1)出土遺物実測図



第13図 SI-02(2) 出土遺物実測図

第4表 SI-02 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm ² g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 坏	口径:11.8 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナダ、底部横方向ミガキ 外:口縁部横ナダ、底部ヘラケズリ、口縁部直下押圧痕あり、無調整、底部スス付着	良好、白色細粒少量、白色粗粒やや多量、黒色細粒・灰色細粒少量	良好	内外:10YR7/3に近い黄緑	口縁部1/6 底部1/3	No.29
2	土師器 坏	口径:(13.8) 底径:— 器高:—	内:口縁部横方向ミガキ、底部横・斜め方向ミガキ 外:口縁部から直下横方向ミガキ、底部ヘラケズリ、一部無調整	良好、白色細粒やや多量、黒色細粒・灰色細粒少量	良好	内外:10YR8/3近い黄緑	口縁部～底部1/6	No.16・57貯蔵穴
3	土師器 坏	口径:(13.4) 底径:— 器高:—	内:口縁部横方向ミガキから、底部放射状ミガキ(口縁部内外とも剥離著しい) 外:口縁部横方向ミガキから、直下無調整、底部ヘラケズリ、粘土接合痕あり	良好、白色細粒少量、黒色細粒・灰色細粒やや少量	良好	内外:7.5YR3/1黒褐色	口縁部1/6 底部部1/6	No.17・57

第3章 松の木遺跡の調査

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
4	須器蓋	口径:— 底径:— 器高:—	内:ロクナデ 外:ロクナデ後回転ヘラケズリ	やや粗い。暗灰色粗粒多量、白色粒少量。	良好	内外:5Y6/9灰	天井部1/5	C区
5	土師器鉢	口径:(14.6) 底径:— 器高:—	内:粗い横方向ミガキ、体部ヘラケズリ 外:口縁部縦方向ミガキ後横方向の粗いミガキ	良好。褐色粒や多い、白色微粒散見。	良好	内外:7.5YR5/3にぶい橙	口縁部~体部1/4	No.8・9・C区
6	土師器甕	口径:(15.2) 底径:— 器高:—	内:横ナデ後粗い横方向ミガキ、胴部ナデか(赤褐色しい) 外:口縁部縦方向ミガキ、胴部横方向ミガキ、外面スス付着	やや良好。赤褐色粒多量、白色粒散見。	やや良好	内:5YR6/4にぶい橙 外:10YR7/3にぶい黄橙	口縁部1/6 体部1/4	No.30
7	土師器甕	口径:13.3 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナデ、胴部横方向ナデ、粘土接合痕あり 外:口縁部横ナデ、胴部上半横方向ナデ、下半縦方向ヘラケズリ。頸部付近押し直しあり	やや良好。白色細粒多量、灰色粒やや多量、黒色細粒少量。	良好	内外:2.5YR5/6明赤褐	口縁部~胴部上半部完存 胴下半部1/2	No.47
8	土師器甕(破)	口径:— 底径:— 器高:—	内:胴部細かい横方向ヘラケズリ、粘土接合痕あり 外:胴部横方向ヘラケズリ後横・縦方向の粗いミガキ	良好。白色細粒・黒色細粒少量、褐色粒散見。	良好	内外:10YR5/2灰黄	胴中位1/4 帯形示部分はA区。	No.3・4・12・13・26~28、A・C区
9	手捏ね土器	口径:(6.6) 底径:5.2 器高:4.3	内:口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ 外:口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ、粘土接合痕あり	良好。白色細粒・黒色細粒少量、褐色粒散見。	良好	内外:10YR7/2にぶい赤褐	口縁部1/6 体部1/4 底部1/2	北カマド周辺
10-1	石製片砥石か	最大長:174.0 最大幅:113.0 最大厚:88.0 重量:1785.8	片面に金属製品を研磨しようとする使用痕があり、砥石として使用した形跡あり。側面は凹む。全面が壊れている。10-2と接合する材質:砂岩					No.14
10-2	石製片支脚か	最大長:310.0 最大幅:133.0 最大厚:92.0 重量:5350.0	直方体状に加工され、表裏面は平らに加工される。片面先端を斜めに削り楔状にする。右側面も平に加工する。全面が壊れている。材質:砂岩					No.23

SI-03 (第14・15図、第5表、図版八・九・二〇)

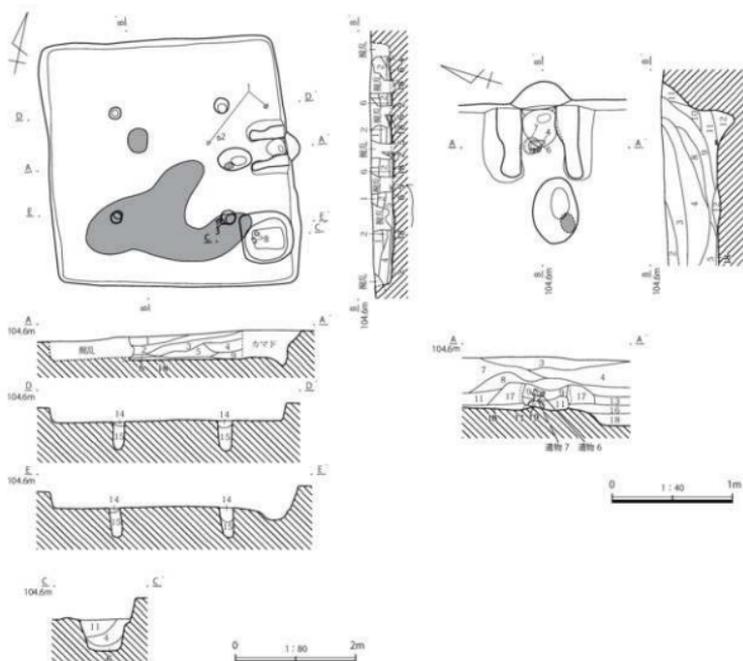
2区南、南端のH28グリッドに位置し、南西コーナーの一部がH29グリッドに入る。南側にSI-05が隣接する。トレンチャーによる掘削が著しい。平面形は、東西3.98m、南北4.23mのほぼ正方形を呈する。南北方向の主軸はN-29°-Wである。確認面から床面までの深さは約28cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面はほぼ平坦で、薄い貼床が施されている。カマドと貯蔵穴の間付近の堀方が少し深くなっていた。全体的にしっかりとしているが、4本の主柱穴の内側が外側よりも硬くなっていた。周溝は確認されなかった。床面からは、主柱穴4本を確認した。規模は、直径は西側2本が20cm、東側2本が25cmで、深さは北東部が53cm、その他の3本は50cmではほぼ同じ深さとなっている。南側の2本は、やや西に傾いている。

南東部コーナーで貯蔵穴を確認した。平面形は、上端86cm×88cm、底面51cm×26cmの方形で、深さ53cmを測る。

カマドは、東壁のほぼ中央部にある。灰白色粘土及び明黄褐色粘土を使用して作られている。カマドの南側の堀方が深くなっている。焚口付近が56cm×38cmの大きさで楕円形状に浅く凹んでいる。燃焼部奥の壁手前がビット状約20cmの深さで凹んでいる。袖は暗灰褐色粘土で作られており、両袖とも壁から直線状に延びる。長さ60cm、幅90cmを測り建物内では方形を呈す。煙道は壁の中段を50cmの幅で斜めに削り、外側に20cm張り出す。燃焼部の中心から左袖寄りに、土師器高坏を転用した支脚が残っていた。

遺物は土師器が出土しているが、完形品は少ない。貯蔵穴から南東の柱穴付近で、破片が集中して出土している。1~5は坏で、1・2・5がカマド周辺、3が南東柱穴付近、4がカマド内から出土している。6・7の高坏はカマド内から出土しており、支脚に転用されたものである。逆位に伏せた7の脚部内に6の脚部が逆位の状態で差し込まれ、白色粘土で固定されていた。8の裏は貯蔵穴から出土している。



SI-03

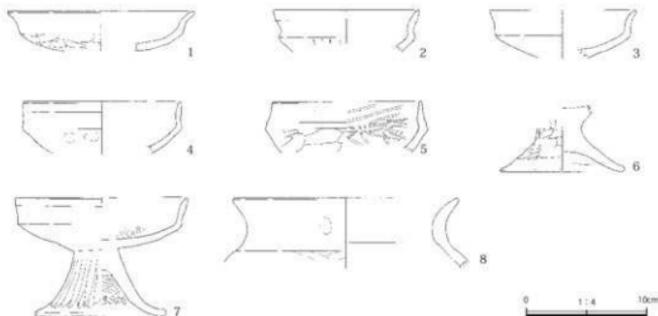
- | | | | | | |
|----|-------|--|----|-------|---|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒微量。しまりあり。 | 11 | 暗褐色土 | 焼土粒多量、焼土ブロック（径0.5～1cm）少量、ローム粒・炭化物粒・灰白色粘土粒微量。しまりあり。 |
| 2 | 褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒・灰白色粘土粒微量。しまりあり。 | 12 | 暗黒褐色土 | 灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック（径約0.5cm）少量、ローム粒・炭化物粒・焼土粒・炭化材（径約0.5cm）微量。しまりあり。 |
| 3 | 暗灰褐色土 | 灰白色粘土粒多量。ローム粒・灰白色粘土ブロック（径1～3cm）少量、炭化物粒・焼土粒・焼土ブロック（径0.5～1cm）微量。しまりあり。 | 13 | 黒褐色土 | 焼土粒・灰白色粘土粒少量、ローム粒・炭化物粒・灰白色粘土ブロック（径約0.5cm）・焼土ブロック（径約0.5cm）微量。しまりあり。 |
| 4 | 黒褐色土 | ローム粒・炭化物粒少量。焼土粒・焼土ブロック（径0.5～1cm）微量。しまりあり。 | 14 | 褐色土 | ローム粒多量、焼土粒少量、炭化物粒・焼土ブロック（径約0.5cm）・炭化材（径約0.5cm）・ロームブロック（径0.5～2cm）微量。しまりあり。 |
| 5 | 暗褐色土 | 焼土粒・焼土ブロック（径1～5cm）多量、ローム粒・炭化物粒・灰白色粘土粒（径0.5～2cm）微量。しまり強い。 | 15 | 黄褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック（径0.5～3cm）微量。しまりややあり。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒微量。しまり強い。 | 16 | 黒褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒・焼土ブロック（径約0.5cm）・ロームブロック（径1～4cm）微量。しまり強い。 |
| 7 | 暗黄褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒・灰白色粘土粒微量。しまりあり。 | 17 | 暗灰褐色土 | 灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック（径1～5cm）多量、ローム粒・焼土粒微量。しまりあり。（カマド跡） |
| 8 | 褐色土 | 焼土粒・灰白色粘土粒少量、ローム粒・炭化物粒・灰白色粘土ブロック（径0.5～1cm）・焼土ブロック（径0.5～1cm）少量、ローム粒・炭化物粒・炭化材（径0.5～1cm）微量。しまりあり。 | 18 | 暗黄褐色土 | ローム粒多量、ロームブロック（径1～4cm）少量。しまりあり。（厨子） |
| 9 | 暗褐色土 | 灰白色粘土粒多量、焼土粒・灰白色粘土ブロック（径0.5～1cm）・焼土ブロック（径0.5～1cm）少量、ローム粒・炭化物粒・炭化材（径0.5～1cm）微量。しまりあり。 | 19 | 灰白色土 | 灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック（径1～4cm）多量。 |
| 10 | 明褐色土 | 焼土粒多量、灰白色粘土粒・焼土ブロック（径0.5～1cm）少量、ローム粒・炭化物粒微量。しまりあり。 | | | |

第14図 SI-03実測図

第3章 松の木遺跡の調査

覆土は攪乱が著しいが、自然堆積の状況がうかがえる。

本住居跡は、床中央部付近で屋根材と考えられる竹類の炭化物が出土していることや、覆土中の特に南半部に焼土や炭化材が多く含まれていることから、南に向かって倒壊した焼失家屋と考えられる。



第15図 SI-03 出土遺物実測図

第5表 SI-03 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径: (15.4) 底径: 一 器高: 一	内: ミガキカ(剥離著しい) 外: 口縁部横ナゲ、底部ヘラケズリ	良好、黒色細粒や や多量、透明細 粒・白色細粒・褐色 粒少量。	良好	内外: 5YR5/8明赤 褐色	口縁部1/4 底部1/4	No. 7・8
2	土師器 杯	口径: (12.0) 底径: 一 器高: 一	内: 口縁部横ナゲ、底部ナゲか 外: 口縁部横ナゲ、底部ヘラケズリ	良好、黒色細粒や や多量、透明細 粒・褐色粒・白色 粒少量。	良好	内外: 5YR6/8橙	口縁部1/6 底部1/6	No. 27
3	土師器 杯	口径: (12.0) 底径: 一 器高: 一	内: 口縁部横ナゲ、底部ミガキカ(剥離著しい) 外: 口縁部横ナゲか、底部不明(剥離著しい)	良好、赤褐色細粒 多量、黒色細粒少 量、白色細粒微 量。	やや 不良	内外: 2. 5YR6/6橙	口縁部1/6 底部部1/4	No. 20・ C区
4	土師器 杯	口径: (13.0) 底径: 一 器高: 一	内: 口縁部横ナゲ、底部ミガキカ 外: 口縁部横ナゲ、直下無調整、押圧痕あり、底部技法不明	良好、褐色粒多 量、黒色細粒・白 色粒やや少量、灰 色粒少量。	不良	内外: 5YR6/6橙	口縁部1/5 底部1/4	No. 33
5	土師器 杯	口径: (12.4) 底径: 一 器高: 一	内: 口縁部横方向ミガキ、底部横・斜め方向 ミガキ 外: 口縁部横ナゲ、底部ヘラケズリ	良好、黒色細粒や や多量、白色細粒 やや少量、赤褐色 粒微量	良好	内外: 2. 5YR6/8 ぶい赤褐色	口縁部1/6 底部1/6	コマ下 周辺
6	土師器 高杯	口径: 一 脚径: 10.0 器高: 一	脚部内: 横ナゲ、趾土接合痕あり 脚部外: ヘラケズリ 頸部: 横ナゲ	良好、白色細粒・ 赤褐色細粒多量、 透明細粒・黒色細 粒少量。	良好	内外: 5YR5/8にぶ い赤褐色	脚部1/2ほぼ完 存	No. 31
7	土師器 高杯	口径: 14.0 脚径: 10.5 器高: 10.0	内: 口縁部横ナゲ、坪部放射状のミガキ(剥 離やあり)、脚部ヘケ目、 外: 口縁部横ナゲ、坪部ミガキカ(摩耗著しい) 、脚部縦方向ヘラケズリ	良好、白色細粒・ 黒色細粒・白色細 粒少量、白色粒や 多量。	やや 良好	内外: 2. 5YR5/6明 赤褐色	完全	No. 32
8	土師器 甕	口径: (18.6) 底径: 一 器高: 一	内: 口縁部横ナゲ、胴部不明(剥離著しい) 外: 口縁部横ナゲ、押圧痕あり、胴部ヘラ ケズリ	やや粗い、白色粗 粒やや多量、白色 粒多量、黒色細粒 やや少量。	良好	内: 5Y5/1灰 外: 2. 5YR/1灰白	口縁部1/4	No. 24 ・25

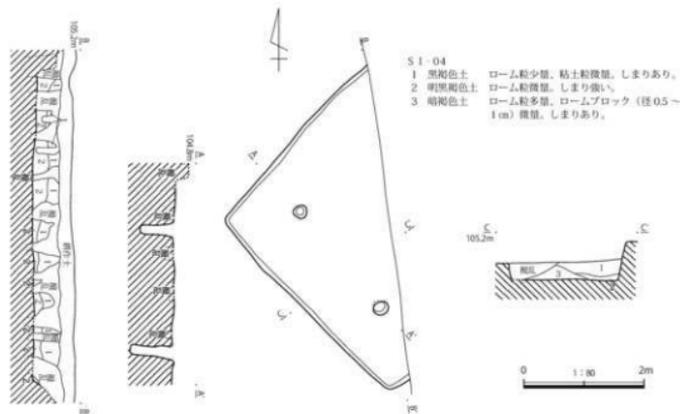
SI-04 (第16・17図、第6表、図版九)

2区南、南側のI28グリッドに位置し、東部分は調査区外となっている。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は、南北が3.98mを測る。東西は北側が3.55m、南側が0.46mまで確認されていることから、方形を呈するものと考えられる。南北方向の主軸はN-44°-Wである。確認面から床面までの深さは28cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、壁際付近で25~28cm、内側に1/3入った部分で33cmと、

建物中心部に向かってやや深くなるが、ほぼ平坦である。周溝は確認されなかった。床面からは、西側で支柱穴2本を確認した。規模は南西側が床面直径24cm、底面14cm、深さ55cm、北西側が床面直径23cm、底面14cm、深さ66cmを測る。北西側が、やや東に傾く。火処は確認できなかったが、北壁にカマドが確認できなかったので、東壁にカマドを持つ可能性がある。

覆土は、堆積状況から人為的に埋め戻された可能性もある。

出土遺物は、土師器杯と須恵器の破片が覆土中から出土している。図示したものは2点で、いずれも小破片である。2は須恵器甕の頸部付近と思われ、櫛描波状文が施される。



第16図 SI-04 実測図



第17図 SI-04 出土遺物実測図

第6表 SI-04 出土遺物観察表

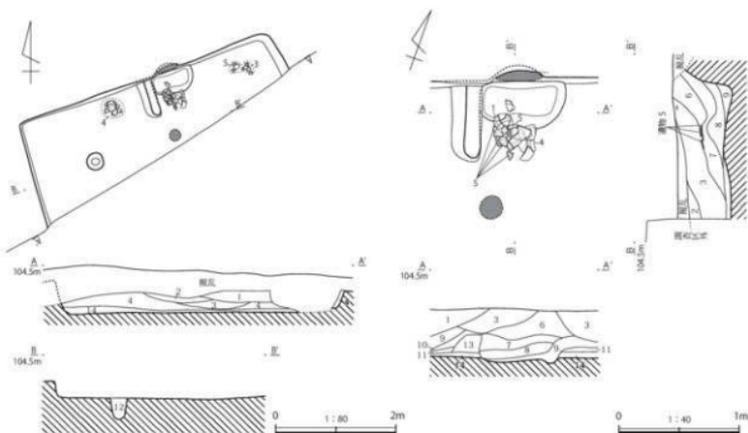
No.	器種	大きさ (cm ²)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 杯	口径:- 底径:- 器高:-	内:ナデ 外:上部無調整, 下位へラケズリ、粘土シ ワあり	良好、白色細粒・ 赤褐色粒少量。	良好	内:2.5YR5/6明赤 褐 外:2.5YR5/4にぶ い橙	底部一部	南区
2	須恵器 甕か	口径:- 底径:- 器高:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、櫛描波状文	良好、白色細粒少 量。	良好	内外:10Y3/2オ リーブ黒	頸部一部	南区

SI-05 (第18・19図、第7表、図版九・一〇・二〇)

2区南、南端のH29グリッドからI28グリッドに位置し、北側の一部が確認され、ほとんどが調査区外となっている。一部にトレンチャーと道路による攪乱が入る。平面形は、東西4.4mを測る。南北は西側が1.80m、東側が0.77mまで確認されていることから、方形を呈するものと考えられる。南北方向の主軸はN-16°-Wである。確認面から床面までの深さは38cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面はほぼ平坦となっている。カマド前面と柱穴の内側が硬化しているが、その他の面は柔らかい。床面からは、北西部の主柱穴1本を確認した。規模は床面直径30cm、底面15cm、深さは36cmで他の住居跡に比べると浅めである。

カマドは、北壁のほぼ中央よりやや東側にある。左袖のみが残っていたことから、右袖は人為的に破壊された可能性がある。袖は灰褐色粘土で作られており壁から直線状に1.0m延びる。幅は右袖がないため推定となるが、痕跡から約1.5mになるものと思われる。焚口は硬化しており、一部赤変している箇所がある。燃焼部奥の壁際は90cm×50cmの大きさの長方形の浅い凹みが見られる。煙道の先端は攪乱を受けているため不明であるが、壁上面を斜めに削り、外側にわずかに張り出す。内部は被熱により硬化赤変している。燃焼部の中心から左袖寄りに河原石と土師器を転用した支脚が据えられている。河原石は暗橙褐色土と粘土混じりの焼土で、上面が水平になるような状態で固められていた。本来ならばカマドがある北東コーナーに



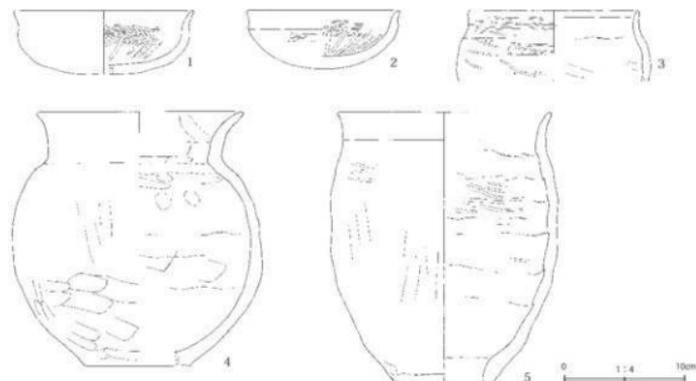
1 暗褐色土	ローム粒少量、ロームブロック (径0.5~1cm) 微量。	8 暗褐色土	焼土粒多量、褐色粘土ブロック (径0.5~2cm)・焼土ブロック (径0.5~2cm)、炭化物粒微量。
2 灰白色土	白色粘土ブロック (径1~4cm) 多量、褐色粘土ブロック (径1~2cm) 少量、ローム粒・焼土粒・焼土ブロック (径0.5~1cm) 微量。	9 暗黒褐色土	褐色粘土ブロック (径1~4cm) 多量、ローム粒・焼土粒・炭化物粒、ロームブロック (径1~2cm) 微量。
3 褐色土	焼土粒・焼土ブロック (径0.5~1cm) 少量、ローム粒・炭化物粒微量。	10 明灰白色土	白色粘土ブロック (径1~3cm) 多量、褐色粘土ブロック (径0.5~2cm)・炭化物粒微量。
4 明褐色土	ローム粒少量、白色粘土ブロック (径0.5~1cm)・褐色粘土ブロック (径1~2cm) 多量、焼土粒・炭化物粒微量。	11 暗褐色土	ローム粒・ロームブロック (径1~3cm) 少量。
5 暗褐色土	ローム粒・ロームブロック (径1~4cm) 少量、炭化物粒微量。	12 明褐色土	ローム粒多量、ロームブロック (径1~3cm) 微量。
6 灰褐色土	褐色粘土ブロック (径1~2cm) 多量、焼土粒少量、ローム粒・白色粘土ブロック (径0.5~1cm)・焼土ブロック (径0.5cm)・炭化物粒微量。	13 灰褐色土	褐色粘土ブロック (径1~3cm) 少量、ローム粒・焼土粒微量。
7 暗褐色土	焼土粒・焼土ブロック (径0.5~2cm) 多量、褐色粘土ブロック (径0.5~1cm) 微量。	14 暗褐色土	ローム粒多量、ロームブロック (径1~3cm) 少量。

第18図 SI-05実測図

貯蔵穴が作られるが、その部分が確認されなかったことから、SI-02同様に東壁にカマドを持っていた可能性もある。

覆土は、自然堆積部分も見られるが、4・5・9層にロームブロックや黒色土ブロックが含まれており、一部人為的に埋め戻した可能性がある。

遺物は土師器が出土している。5点を図示した。1・2は坏である。1はカマド支脚の河原石の上で中心が押されて割れた状態で出土していることから、支脚の高さを調整するために置かれていたと考えられる。4の甕は、カマド内で支脚上に据えられ、上から押し潰された状態で出土している。5の甕はカマド西側袖



第19図 SI-05 出土遺物実測図

第7表 SI-05 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm×φ)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 坏	口径:(14.8) 底径:— 器高:5.4	内:口縁部横ナゲ後横方向ミガキ、底部放射状ミガキ(剥離著しい) 外:口縁部横ナゲ、底部不明(摩耗著しい)	やや良好、黒色細粒やや多量、白色細粒・赤褐色粒少量。	やや不良	内外:2.5Y5/6明赤褐色	口縁部1/2 底部1/2	No.10
2	土師器 坏	口径:(12.6) 底径:— 器高:5.0	内:口縁部横ナゲか、底部横方ミガキ後放射状ミガキ(剥離著しい) 外:口縁部横ナゲか、底部不明(摩耗著しい)	やや良好、白色細粒多量、黒色細粒・褐色粒やや多量。	やや不良	内外:2.5Y5/6明赤褐色	口縁部1/2 底部1/2	カマド左側付近
3	土師器 鉢	口径:(14.0) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナゲ、体部ナゲ、粘土接合痕あり 外:口縁部横ナゲ後粗い横方向ミガキ、体部ナゲか無調整、全面粗い横方向ミガキ	やや良好、白色細粒やや少量、黒色細粒・褐色粒少量。	良好	内:7.5YR4/2灰褐色 外:7.5YR4/3暗赤褐色	口縁部1/4 体部上半1/4	No.3
4	土師器 甕	口径:16.0 底径:(8.8) 器高:21.6	内:口縁部横ナゲ後ヘラナゲ、ナゲ、胴部ナゲ、ヘラナゲ、上部一部に押し痕あり、粘土接合痕あり 外:口縁部横ナゲ、胴上半部ナゲ、下半部縦方向ヘラケズリ 外面口縁部へ胴上半部スス付着	粗い、白色粒・灰色粒多量、黒色細粒・褐色粒・灰色石粒少量。	良好	内:2.5Y7/2灰黄 外:10YR7/4に近い黄褐色	口縁部1/5 底部1/4	No.2-9
5	土師器 甕	口径:17.6 口径:(8.0) 器高:22.9	内:口縁部横ナゲ、胴部横方向ミガキ、粘土接合痕明瞭 外:口縁部横ナゲ、胴部ナゲ、一部横方向ミガキ	良好、灰色細粒・黒色細粒・灰色粒やや多量、褐色粒少量。	やや良好	内:5YR4/6赤褐色 外:7.5Y6/6褐色	口縁部3/4 胴部2/5 底部1/2	No.3・4・5・6・7・8

の脇から出土しているが、胴部の一部は、カマド内の支脚の一部として出土している。

SI-06 (第20～22図、第8表、図版一〇・二一)

2区北、台地平坦部のG21グリッドに位置し、東側の一部がH21グリッドに、南側の一部がG20グリッドに、南東角がH22グリッドに入る。北東コーナーの上面をSD-04によって若干削られている。平面形は東西6.90m、南北の東側が7.00m、西側が6.70mのややいびつな方形を呈する。南北方向の主軸は、N-4°-Wでほぼ北を向いている。今回の調査では、最大の規模を持つ。確認面から床面までの深さは西側で51cm、東側で40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床面は概ね平坦であるが、東側に向かってやや低くなっている。全体的に厚さ3～6cmの貼床が施されている。特に南側入口か柱穴間の中央部が硬化している。主柱穴4基と入口ピットと考えられる柱穴1基を確認した。主柱穴は、南西側が床面直径36cm、底面20cm、深さ72cm、南東側が床面直径45cm、底面16cm、深さ105cm、北西側が床面直径54cm、底面20cm、深さ80cmでやや西に傾く。北東側が床面直径56cm、底面19cm、深さ86cmでやや東へ傾く。入口ピットは南北61cm、東西56cm、深さ46cmで、上面はほぼ円形で、底面は西側がやや直線的になる。底面中央部が5cmほど凹んでいる。

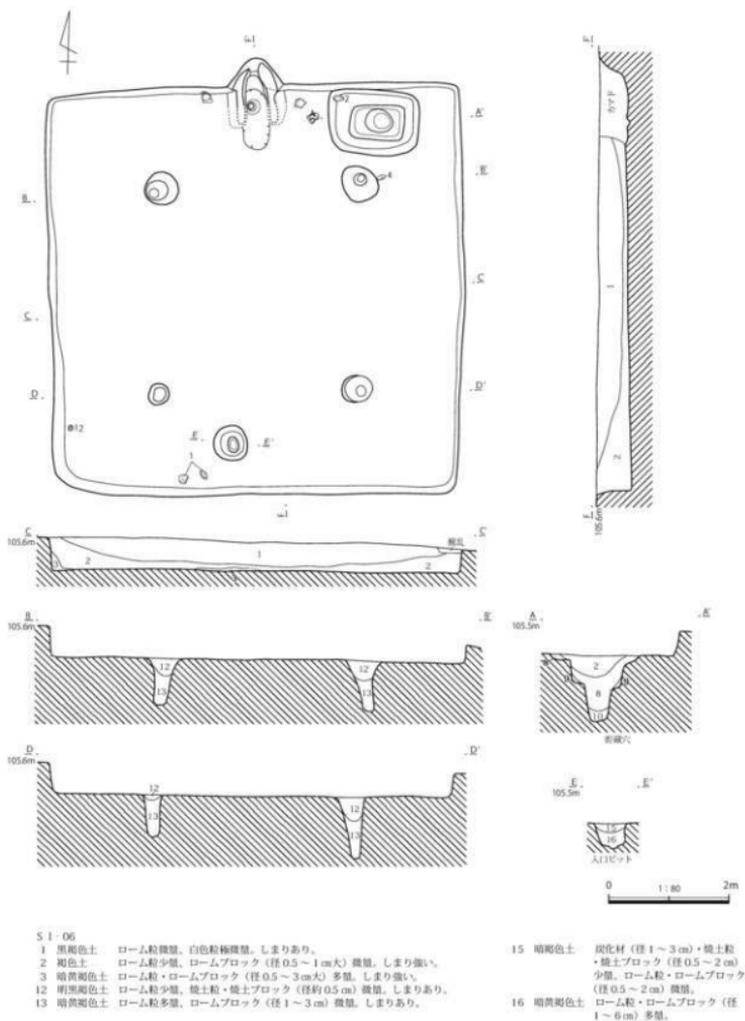
北東コーナーで貯蔵穴を確認した。穴は3段に掘られており、平面形は南北1.1m、東西1.5mの長方形で、床面から10cm程浅く掘下げた後、南北0.6m、東西1.1m深さ46～56cmの規模で長方形に掘り下げ、さらに直径45cm深さ55cmのピット状に掘り下げている。ピット状に掘られた貯蔵穴が、昭和57年調査時の4号住居址でも見られる。

カマドは北壁中央にあり、壁の上半部を三角形に掘り込んで作られている。袖は床面を掘り下げ、盛土した上に暗灰褐色粘土で作られているが、覆土と判別しにくく両袖とも先端部は確認できなかった。壁の掘り込まれた部分から直線状に伸び、長さは、推定で約60cm、幅は1.0mを測る。焚口付近から燃焼部にかけて40cm×1.4mの大きさで、楕円形状に浅く掘り下げている。煙道は、燃焼部から壁を斜めに立ち上がり、建物外側に50cm張り出す。

燃焼部の中心から左袖寄りに、盛土した上に土師器甕・甔の破片や環が重ね併せた状態で出土しており、支脚として使用されたものと考えられる。

遺物は土師器と須恵器が出土している。カマド付近と中央部、南西側主柱穴付近に集中して出土している。12点を図示した。1～7は土師器環である。1は南壁の入口ピット付近から、2は貯蔵穴上面から、4は北東柱穴付近から、5はカマド西側周辺出土している。1・5・6は漆仕上げされている。3はカマド内の支脚の土台となる盛土上で、重ねられた土器片の一番下から伏せた状態で出土しているため、支脚の一部として転用されたものである。10・11は甔で、いずれもカマド東側と貯蔵穴の間の床面から出土している。10は小型の甔で、接合しない胴部破片があり、口縁部の一部を除いて完形に近いものになる。11は大型の甔だが、口縁部から胴部の一部で、下半部分は支脚部分から出土していることから、支脚の一部として転用されたものと考えられる。12は手捏ね土器で、南西部の壁際から出土している。底部に糞状の圧痕が見られる。9は大型の甕で、住居跡中央部から南西柱穴部にかけての覆土中から出土している。同一個体と思われる胴部破片が多数と底部が出土しているが、底部までの接合には至らなかった。出土状態から、建物が廃棄された埋没直後に投棄されたものと考えられる。8の須恵器環は、SI-07から出土した上半部が接合したものである。底部に同心円二重ケズリが施されている。

SI-07 (第23～25図、第9表、図版一二・二一)



第20図 SI-06 実測図

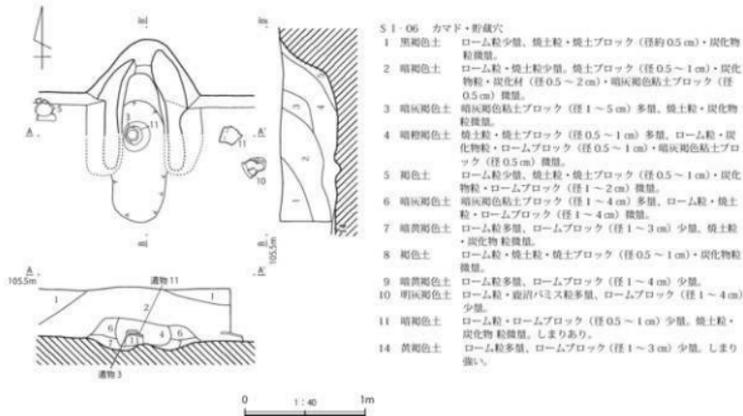
2区北、調査区の北端にあたるG20グリッドに位置し、建物の北東コーナーが調査区外となる。平面形は東西6.20m、南北5.98mを測り、ほぼ正方形を呈する。南北方向の主軸はN-18°-Wである。確認面から床面までの深さは、壁際で58cm、中央部付近で66cmとなっており、若干中央部が凹む。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

床は北壁のカマドの部分を除いて、幅20cm前後、深さ約5cmの浅い溝溝が巡る。溝溝を持つ住居は、今回の調査では本住居のみである。貼床がほぼ全体に薄く施されており、南西部の柱穴から壁にかけては、やや高くなり、硬化している。カマドの焚口付近にも、若干床面の硬化が見られる。主柱穴が4基確認されている。規模は南西部が床面直径49cm、底面30cm、深さ72cm、南東部が床面直径45cm、底面25cm、深さ67cm、北西部が床面直径41cm、底面24cm、深さ67cm、南東側が床面直径50cm、底面23cm、深さ64cmを測り、やや西に傾く。

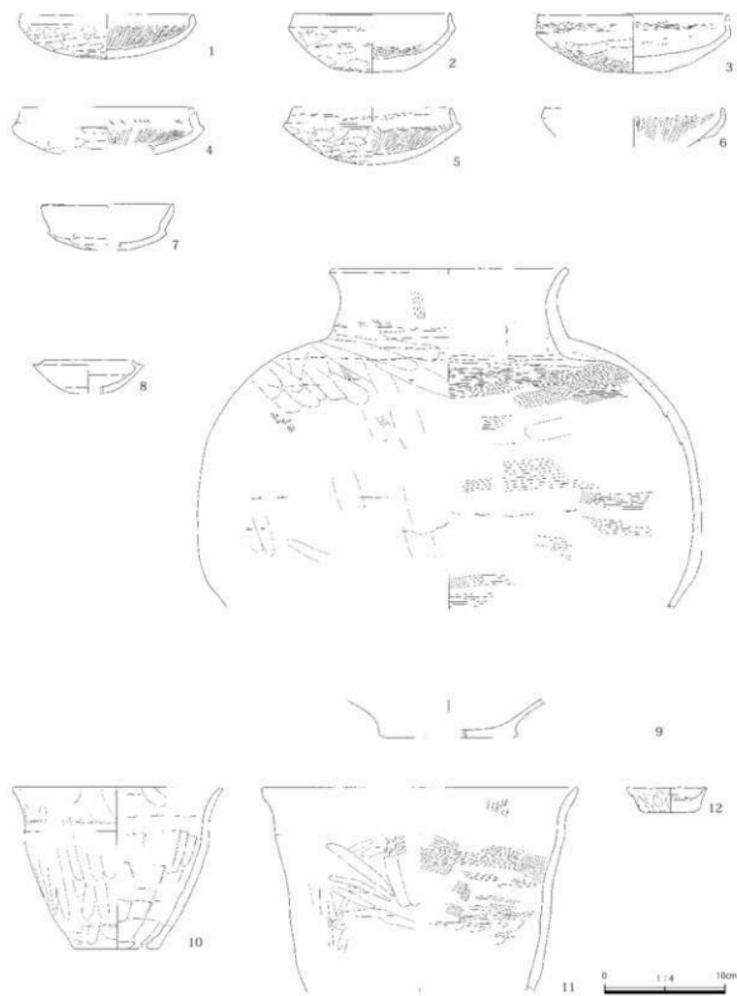
覆土は第1層の黒褐色土が厚く堆積していることから、第2層まで堆積した後人為的に埋め戻したものと考えられる。

カマドは北壁のほぼ中央部にあり、壁の上半部を三角形に掘り込んで作られている。袖は床面を掘り下げてから盛土しその上に構築している。盛土と袖に使用されている明灰褐色粘土には焼土が混入しているため、他で使用していた袖の粘土を再利用したものと考えられる。両袖とも壁奥からやや左に傾いて直線状に延びており、長さは70cm、幅1.1mを測る。焚口付近から燃焼部にかけて40cm×1.4mの大きさで、楕円形状に浅く掘り下げている。燃焼部奥の中心に、被熱し赤変した箇所が見られる。煙道は、燃焼部から壁を斜めに立ち上がり、建物外側に60cm張り出す。このカマドは、SI-06と類似した構造になっている。

遺物は、覆土中から土師器環、高環、須恵器環、裏が出土しているが、いずれも破片が多く完形品はない。床面近くから出土した5点を図示した。1の土師器環と4の土師器高環は、カマド付近の床面近くから出土している。



第21図 SI-06カマド実測図

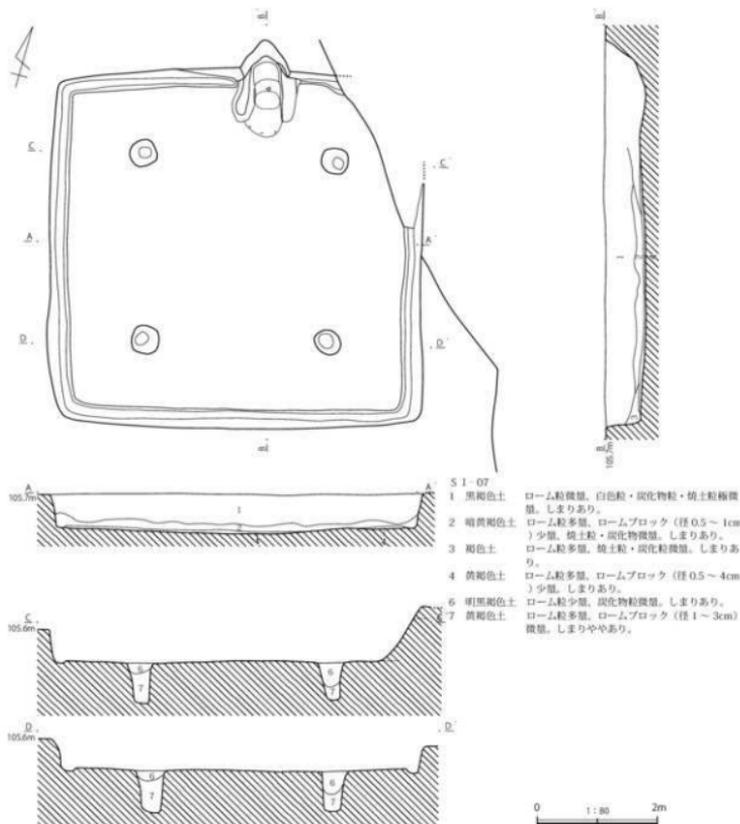


第22図 SI-06 出土遺物実測図

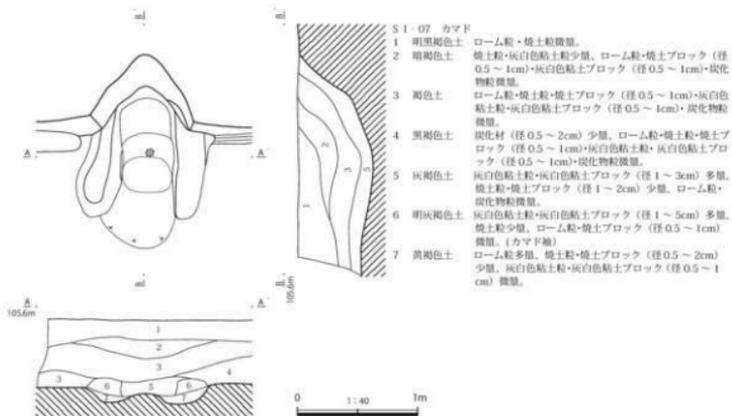
SI-09 (第28～30図、第11表、図版一三・二一・二二)

1区北寄りのF14グリッドからF15グリッドにかけて位置する。住居の中央部分が確認され、東西両側の壁が調査区外となる。西側上面は、SD-05により若干削られている。平面形は南北が4.4mで、東西の壁が南北とも直線が3.3m確認されていることから、方形を呈するものと考えられる。南北方向の主軸は、N-17°-Wである。確認面から床面までの深さは、南側壁付近で36cm、中央部付近で46cmと中央部が若干深くなる。

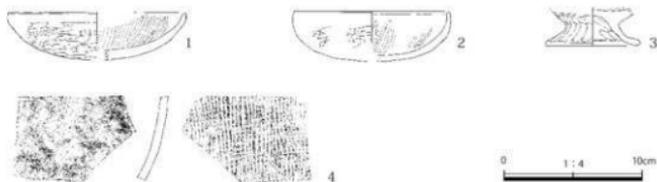
床はほぼ平坦で、4～10cmの厚さで全面に貼床が施されている。柱穴間の中央部及びカマド全面から貯蔵穴付近が硬化している。柱穴が4基確認されており、いずれも上面が斜めに開いている。直径は、南西側



第23図 SI-07実測図



第24図 SI-07カマダ実測図



第25図 SI-07出土遺物実測図

第9表 SI-07 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm/g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 平	口径:(12.8) 底径:— 器高:3.5	内:口縁部横ナデ後内面放射状ミガキ 外:口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ後横方 向の粗いミガキ	良好。赤褐色粒や や多量、黒色細粒 少量。	良好	内外:5YR5/6明赤 褐色	口縁部1/8 底部1/6	床面付 覆層土
2	土師器 平	口径:(11.2) 底径:— 器高:4.0	内:口縁部横ナデ、底部放射状ミガキ 外:口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ後横方 向の粗いミガキ	良好。赤褐色粒や や多量、白色細 粒、黒色細粒少 量。	不良	内外:2.5Y4/8赤 褐色	口縁部一部 底部1/4	D区
3	土師器 高平	口径:— 脚径:6.7 器高:—	脚部内:上半部ナデ、下半部ケズリ。胴部 内面横ナデ。脚部外:ケズリ 杯部内:ミガキ(剥離著しい) 杯部外:ミガキ	良好。赤褐色粒多 量、白色細粒、黒 色細粒少量。	良好	内外:2.5Y5/8赤 褐色	杯部一部 脚部2/3	カマダ 左側床 面付近
4	須恵器 甕	口径:17.6 孔径:(8.0) 器高:22.9	内:胴部ナデ、一部同心円当て具痕あり 外:胴部梯子叩き	良好。白色細粒少 量、褐色粒微量。	良好	内:N5/灰 外:N4/灰	胴部一部	B区

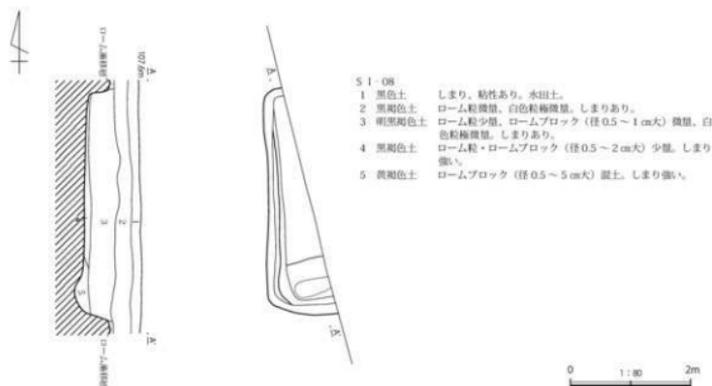
は上面 38cm、底面 15cm、南東側は上面 40cm、底面 20cm、北西側は上面 38cm、底面 18cm、北東側は上面 45cm、底面 18cmを測る。南壁中央部に南北 61cm、東西 50cm、深さ 7cmの楕円形の掘り込みが見られる。

北壁のカマダ東側で、貯蔵穴を確認した。規模は南北 74cm、東西は 30cmまで確認され、東側は調査区外となる。内部は二段となっており、15cm程掘り下げ、そこからさらに 10cm程さらに掘り下げている。底面の規模は、南北で約 30cmである。

カマドは北壁にあり、ほぼ中央部にあたると考えられる。壁全体を1.7mの幅で大きく半円形状に掘り込んで作られているが、南北の土層を見ると6・7層を切るように掘り込んでいる様子がうかがえる。6・7層には粘土粒や焼土粒・焼土ブロックが含まれていることから、カマドが埋没後に掘られた可能性もある。

右袖奥に平坦部を作り、やや垂直に立ち上がってから外側に大きく開いて立ち上がる。両袖は明灰褐色粘土で貼床の上に構築されており、両袖とも壁から直線状に延び、長さ60cm、幅90cmを測る。焚口付近から燃焼部にかけて長さ1.2mの浅い掘り込みが見られる。焚き口付近の掘り込みは、直径60cmの円形状になっている。燃焼部は、壁近くになり、両袖内側が赤変していた。掘り込まれた壁の最奥部は、約20cmビット状に凹んでいる。煙道は、30cm掘り込んだ壁から斜めに段をなして立ち上がり、建物外側に90cm張り出す。

遺物は土師器のほか、白玉1点、覆土中から弥生土器片1点が出土している。11点を図示した。1は大型の碗で、貯蔵穴内から出土している。2～6は坏である。2はカマド付近からの出土で内外面漆仕上げ、3は北壁のカマド付近からの出土で口縁部から内面が漆仕上げ、4・5はカマド付近出土で、5は内面漆仕上げが施されている。6は南壁付近から出土している。7は小型の鉢で、北壁のカマド付近から出土している。内外面ともヘラケズリの後ミガキが施されており、丁寧な作りである。8の匳は南壁からの出土で、胴部外面に粗いミガキが施されている。10の白玉は粘板岩製で、3の坏の脇から出土している。



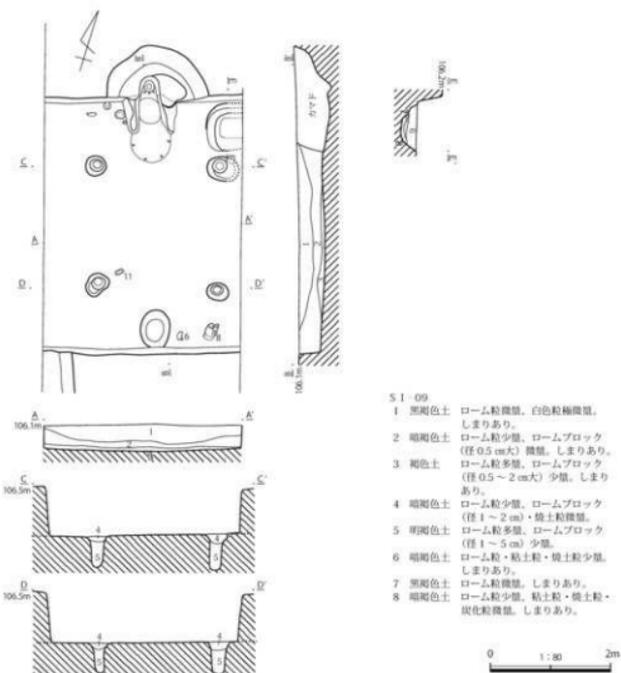
第26図 SI-08 実測図



第27図 SI-08 出土遺物実測図

第10表 SI-08 出土遺物観察表

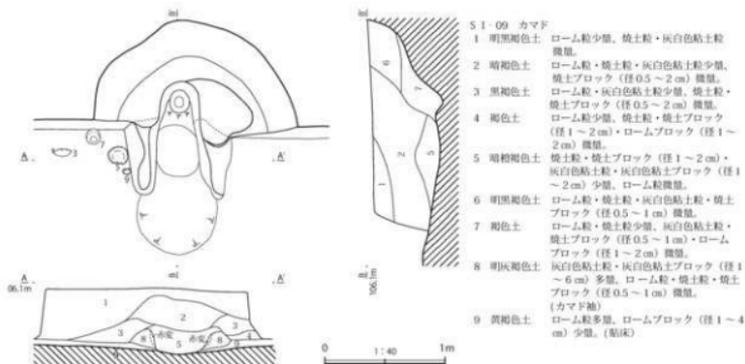
No.	器種	大きさ (cm/g)	技法・特徴等	粘土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 坏	口径:- 底径:- 器高:-	内:口縁部横ナズ後ミガキ 外:ミガキ	良好。白色細粒少量、灰色粒微量。	良好	内外:5YR4/1褐色	口縁部一部	南区



- S I 09
- 1 黒褐色土 ローム粒微細、白色粒極微細、しまりあり。
 - 2 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (径 0.5 cm 大) 微細、しまりあり。
 - 3 褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (径 0.5 ~ 2 cm 大) 少量、しまりあり。
 - 4 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (径 1 ~ 2 cm) ・焼土粒微細。
 - 5 明褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (径 1 ~ 5 cm) 少量。
 - 6 暗褐色土 ローム粒・粘土粒・焼土粒少量、しまりあり。
 - 7 黒褐色土 ローム粒微細、しまりあり。
 - 8 暗褐色土 ローム粒少量、粘土粒・焼土粒・炭化粒微細、しまりあり。

0 1:80 2m

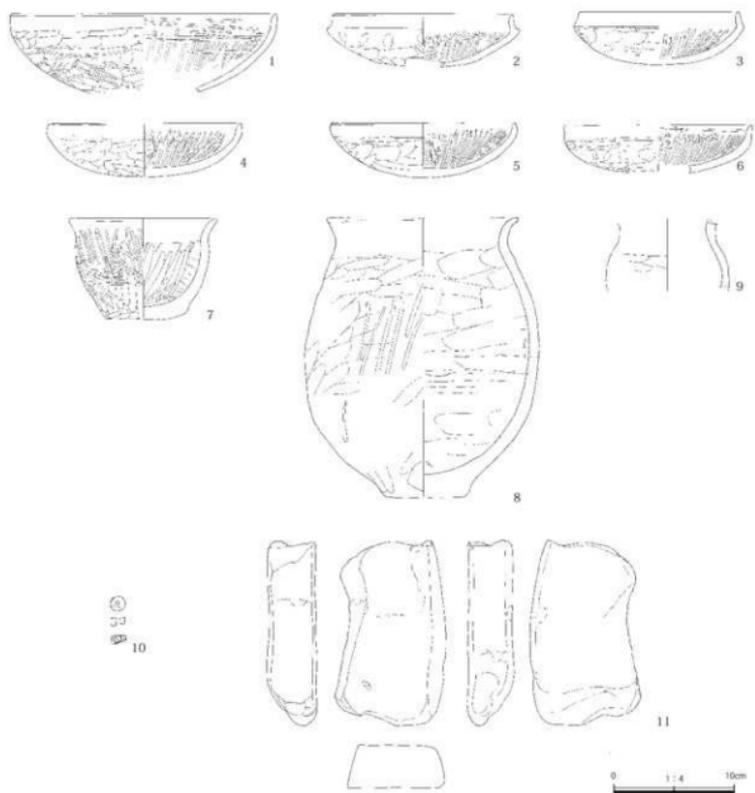
第 28 図 SI - 09 実測図



- S I 09 カマダ
- 1 明黒褐色土 ローム粒少量、焼土粒・灰白色粘土粒微細。
 - 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・灰白色粘土粒少量、焼土ブロック (径 0.5 ~ 2 cm) 微細。
 - 3 黒褐色土 ローム粒・灰白色粘土粒少量、焼土粒・焼土ブロック (径 0.5 ~ 2 cm) 微細。
 - 4 褐色土 ローム粒少量、焼土粒・焼土ブロック (径 1 ~ 2 cm) ・ロームブロック (径 1 ~ 2 cm) 微細。
 - 5 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック (径 1 ~ 2 cm) ・灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック (径 1 ~ 2 cm) 少量、ローム粒微細。
 - 6 明暗褐色土 ローム粒・焼土粒・灰白色粘土粒・焼土ブロック (径 0.5 ~ 1 cm) 微細、ブロック (径 1 ~ 2 cm) 微細。
 - 7 褐色土 ローム粒・焼土粒少量、灰白色粘土粒・焼土ブロック (径 0.5 ~ 1 cm) ・ロームブロック (径 1 ~ 2 cm) 微細。
 - 8 明暗褐色土 灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック (径 1 ~ 6 cm) 多量、ローム粒・焼土粒・焼土ブロック (径 0.5 ~ 1 cm) 微細。
 - 9 黄褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (径 1 ~ 4 cm) 少量。(船床)

0 1:40 1m

第 29 図 SI - 09 カマダ実測図



第30図 SI-09 出土遺物実測図

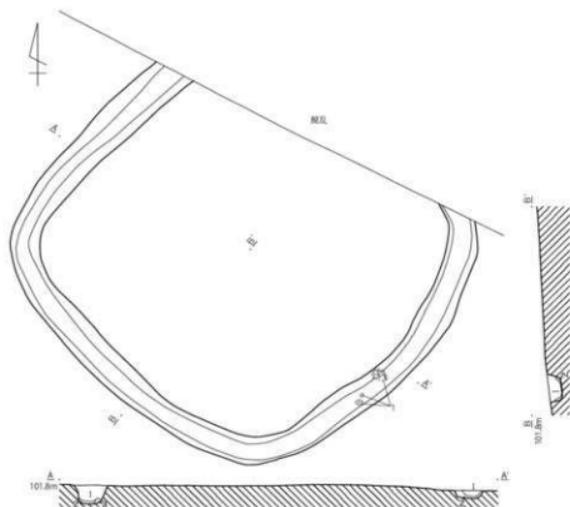
第11表 SI-09 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm/g)	技法・特徴等	胎土	施成	色調	残存率	注記
1	土師器 甕	口径:(22.0) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナゲ後放射状のミガキ炭塊方 向の粗いミガキ 外:口縁部横ナゲ、直下・底部ヘラケズリ、 中央部無調整、押し直あり、全面粗いミガ キ 口縁部から内面の一部漆仕上げか	良好、白色細粒多 量、黒色細粒褐色粒 少量、灰色粗粒、 白色粗粒微量。	良好	内外:5YR5/6明赤 黒	口縁部1/3 底部1/3	野崎穴 覆土
2	土師器 杯	口径:(15.0) 底径:— 器高:4.5	内:口縁部横ナゲ、底部放射状ミガキ 外:口縁部横ナゲ、底部外周押し直あり、 無調整、中央部付ヘラケズリ、黒斑あり 内外面漆仕上げ	良好、白色細粒・ 黒色細粒・褐色粒・ 透明粒少量。	良好	内:7.5YR3/1黒褐 外:10YR2/1黒	口縁部1/3 底部1/2	カマド 西床面 付近・ 左袖付 近・カ マド内
3	土師器 杯	口径:13.5 底径:— 器高:4.5	内:口縁部横ナゲ、底部放射状ミガキ 外:口縁部横ナゲ、底部ヘラケズリ 口縁部から内面全面漆仕上げ	良好、黒色細粒や や多量、白色細粒 やや少量。	良好	内:10YR3/1黒褐 外:7.5YR6/6橙	口縁部3/4 底部ほぼ完 存	No.1
4	土師器 杯	口径:(16.0) 底径:— 器高:4.5	内:口縁部横ナゲ後内面放射状ミガキ 外:口縁部横ナゲ、底部上半部ナゲ、下半 部ヘラケズリ	良好、白色細粒多 量、黒色細粒やや 多量、褐色粒少 量。	良好	内外:2.5YR5/6明 赤褐	口縁部1/4 底部1/4	カマド 西床面 付近
5	土師器 杯	口径:13.2 底径:— 器高:4.9	内:口縁部横ナゲ後放射状ミガキ 外:口縁部横ナゲ、底部ヘラケズリ 内外面漆仕上げ	良好、黒色細粒・ 白色細粒・白色粗 粒やや多量、黒色少 量。	良好	内外:5YR5/6明赤 褐	口縁部4/5 底部ほぼ完 存	No.3
6	土師器 杯	口径:(15.6) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナゲミガキ、底部放射状ミガ キ 外:口縁部横ナゲ、直下・底部ヘラケズリ、 外周部押し直あり、無調整	良好、黒色細粒多 量、白色細粒やや 多量。	良好	内外:7.5YR6/6橙	口縁部1/3 底部1/3	No.7
7	土師器 鉢	口径:12.3 底径:6.9 器高:8.6	内:口縁部横ナゲ、体部上位ヘラナゲ、中 位～底部ヘラケズリ、底部ミガキ(体部や や割離あり) 外:口縁部横ナゲ、体部～底部ヘラケズリ 後縦方向ミガキ、黒斑あり	良好、白色細粒・ 褐色粒少量。	良好	内:7.5YR5/1褐色 外:7.5YR7/6橙	完存	No.2
8	土師器 甕	口径:(13.8) 底径:6.8 器高:24.0	内:口縁部横ナゲ、胴部ナゲ、一部横方 向ヘラナゲ、粘土接合痕あり 外:口縁部横ナゲ、胴部ヘラケズリか (内外面とも厚粘着して調整不明瞭)、 下半部調整不明瞭、下端部ナ ゲ、黒斑あり 底部ヘラケズリ	やや粗い、白色細 粒・灰色細粒やや 多量、白色粗粒や や少量、黒色細粒 微量。	やや 良好	内外:7.5YR7/6橙	口縁部1/2 胴部2/3 底部完存	No.6
9	土師器 壺	口径:— 孔径:— 器高:—	内:口縁部横ナゲ、胴部ヘラケズリか 外:口縁部横ナゲ、胴部ヘラケズリか (内外面とも厚粘着して調整不明瞭)	良好、白色細粒少 量、黒色細粒微 量。	やや 不良	内:2.5Y7/3淡黄 外:2.5Y7/2灰黄	口縁部3/4 胴部2/5 底部1/2	No.4
10	石製品 白土	直径:1.3 中心孔径:0.3 厚さ:0.7 重量:1.81	側面:縦方向ミガキ 材質:粘板岩				片面一部欠 く	
11	石製品 砥石	最大長:156.0 最大幅:8.9 最大厚:3.6 重量:935.30	表面面を砥面として使用する。 材質:ホルンフェルス					No.11

(2) 方形周溝遺構

SZ-01 (第31・32図、第12表、図版一三・一四・二二)

3区の調査区北端、H33グリッドからI33グリッドにかけて位置し、南東部コーナーがH34・I35グリッドに入る。北半部が調査区外だったが、北側掘瓦部付近まで調査区を拡張した結果、東側の溝の北東コーナー付近まで確認することができた。平面形は東西6.86m、東側南北で6.0m、西側南北は4.2mまで確認できており、南西側の溝がやや膨らむが、隅丸正方形を呈するものと考えられる。南北方向の主軸はN-34°-Eである。溝は、確認面の幅が45～55cm、下幅20～25cm、深さは溝外側からの計測で東側が14cm前後、南側が22cm前後、西側が30cm前後となっている。底面は平坦で、西側がやや狭くなっている。

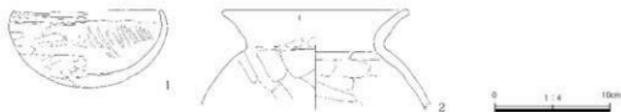


SZ-01

- 1 黒色土 ローム粒極微細。しまりあり。
- 2 暗褐色土 ローム粒多量。ロームブロック（径0.5～1cm大）少量。しまりあり。
- 3 黄褐色土 ロームブロック。

0 1:80 2m

第31図 SZ-01実測図



第32図 SZ-01出土遺物実測図

第12表 SZ-01出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm-g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 甕	口径:12.9 底径:— 器高:7.0	内:口縁部横ナデ, 体部放射状ミガキ 外:口縁部横ナデ後横方向ミガキ, 体部横 方向の粗いヘラケズリ	良好。白色細粒や やや多量。褐色粒 やや少量。黒色細粒 少量。	良好	内外:5YR5/2灰 赤褐	口縁部2/3 体部底部一 部欠く	No.1・ 2・3
2	土師器 甕	口径:(16.0) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナデ, ヘラナデ, 胴部ヘラナ デ, 一部ヘラケズリ 外:口縁部横ナデ, ヘラナデ, 押圧痕あ り, 胴部斜め方向ヘラケズリ	やや粗い。白色細 粒多量。白色粗粒 やや多量。褐色 粒・黒色細粒少 量。	良好	内外:5YR4/4に 近い赤褐	口縁部1/5 胴部上段1/6	

遺物は、東側の溝内から土師器が出土している。南側溝に遺物は見られず、西側溝からは、土師器の小破片が数点出土している。2点を図示した。1は坏で底部の一部を欠くがほぼ完形である。外面はヘラケズリ、内面は放射状のミガキを施す。2は、甕の口縁部から胴上半部である。胴内外ともヘラケズリされている。

(3) 土坑

SK-04 (第33図、図版一四)

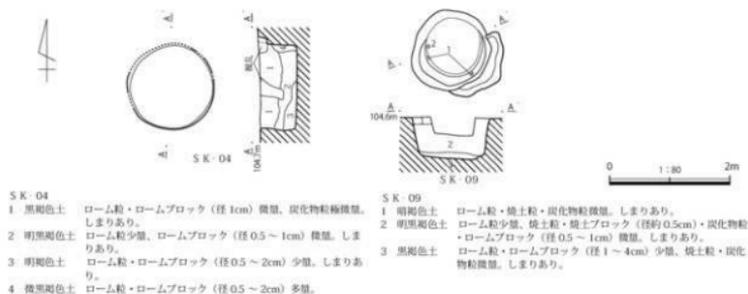
2区南、I28グリッド南西端、SI-02南東コーナー付近に位置する。遺構上面は、トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は、直径東西1.40m、南北1.30mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは49～64cmで、南西側がやや浅い。ほぼ垂直に掘られ、底面は平坦で円筒形を呈する。屋外貯蔵穴と考えられる。

底面付近から土師器甕の破片が出土している。

SK-09 (第33・34図、第13表、図版一四・一五・二二)

2区南、I29グリッド北側、SI-03の東約2mのところのところに位置する。平面形は直径東西1.30m、南北1.46mのほぼ円形を呈するが、南東部側に15～30cmの幅で張り出している。張り出し部の深さは約8cmである。確認面からの深さは70～72cmで、底面はほぼ平坦で円筒形を呈する。壁は遺構の中心から北側はほぼ垂直に立ち上がるが、南側は底面から約10cmまで垂直に立ち上がり、わずかに平坦面を作ってからやや外反気味に立ち上がる。屋外貯蔵穴と考えられる。

底面付近から土師器片が出土している。1は小型甕の口縁部～体部上半部、2は小型甕の体部下半部～底部である。どちらも外面の色調や内外面に丁寧なヘラミガキが施されていることなどから、同一個体の可能性もある。



第33図 SK-04・09実測図



第34図 SK-09出土遺物実測図

第13表 SK-09 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 小型甕	口径:(9.6) 底径:— 器高:—	内:口縁部横ナゲ後縦方向ミガキ、体部ナゲ後放射状ミガキ 外:口縁部横ナゲ、体部ヘラズリ後外面全体を縦・横方向ミガキ	良好、赤褐色粗粒多量、白色微粒や多量、黒色微粒微量。	良好	内:7.5YR3/1黒褐 外:10YR3/1黒褐	口縁部～体部上半1/3	No.2-5
2	土師器 小型甕	口径:— 底径:(5.4) 器高:—	内:ナゲ後縦方向ミガキ、底部ミガキ 外:体部ヘラズリ後縦方向ミガキ	良好、赤褐色粗粒多量、白色微粒や多量、黒色微粒微量。	良好	内:5YR5/4にふい 赤褐 外:10YR3/1黒褐	体部下半1/3 底部2/3 (No.1の下半部か)	No.6

第3項 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 井戸跡

SE-01 (第35図、図版一六・一七)

3区、I34グリッド南西端、SZ-01の南約6mのところらに位置する。本遺構から南は、低地に向かって緩やかに傾斜をしており、遺構も確認されていない。平面形は上面が一部トレンチャーにより破壊されているが、確認面で直径が東西1.45m、南北1.30mのほぼ円形を呈し、約50cm掘り下げたところから直径が90cmとやや細くなる。確認面から1.60m掘り下げた地点で湧水が見られた。最深部は、ピンボールドで確認したところ約1.9mと推定される。

覆土はロームブロックが層状に堆積しており、その上に黒色土が堆積している。また湧水点付近に20～40cm大の河原石が多数投棄されていることから、埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物がないため、時期は不明である。

(2) 土坑

SK-01 (第35図、図版一五)

2区南、H24グリッド南端に位置する。平面形は東西0.83m、南北1.69m、確認面からの深さ20cm～30cmの長方形土坑であるが、トレンチャーより新しいことが判明したため、現代のもの判断した。

SK-02 (第35・37図、第14表、図版一五・二二)

2区南、I25グリッド東端に位置し、東側は調査区外となる。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は、確認面で南北1.95m、東西は北側で0.65m、南側で0.6mまで確認できることから、長方形の土坑と考えられる。確認面からの深さは、18cm～24cmであるが、南北の土層では、約70cmの深さがあることが確認できる。また、北側壁も底面から約10cm立ち上がり、幅15cmの平坦部を作ってからさらになだらかに立ち上がっていることから、南北の長さは、2.5m以上になると考えられる。両端の立ち上がりは、攪乱のため不明である。

中央部からやや北寄りの底面から、肥前系の磁器染付碗の底部片が出土している。時期は、18世紀第3～第4四半期前半と考えられる。

本遺構は、覆土の状態から近世以降の墓坑と考えられる。

SK-03 (第35・37図、第14表、図版一五・二二)

2区南、I25グリッド東端、SK-02南側約70cmのところらに位置し、東側は調査区外となる。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は、確認面で南北2.35m、東西は北側で0.60m、南側で0.2mまで確認できることから、長方形の土坑と考えられる。確認面からの深さは、20cm～30cmであるが、南北の土層では、約60cmの深さがあることが確認できる。南北両端の立ち上がりは攪乱のため確認できなかった。

北壁付近の底面から、美濃窯産の陶器丸碗の破片が出土している。時期は、17世紀第2四半期～18世紀第1四半期前半と考えられる。

本遺構は、遺構の形状や主軸の方向がSK-02と類似していることや、覆土の状態から近世以降の墓坑と考えられる。

SK-05 (第35図、図版一六)

2区南、H23グリッド南端、SK-06、SK-07から約5m南に位置する。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は、東西2.3m、東側南北0.65m西側南北0.8mの長方形の土坑である。確認面からの深さは、東端で9cm、西端で19cmと西に向かってやや深くなる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物が無いため時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降と考えられる。

SK-06 (第35図、図版一五)

2区南、H24グリッドのほぼ中央、SK-07のすぐ西側に位置する。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は東西0.60m、南北4.60m、主軸をほぼ北に向けた、細長い長方形の土坑である。確認面からの深さは24～30cmで、底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物が無いため時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降と考えられる。

SK-07 (第35・37図、第14表、図版一五)

2区南、H24グリッドのほぼ中央、SK-01とSK-06の間に位置する。トレンチャーによる攪乱が著しい。平面形は東西0.60m、南北1.75mの長方形の土坑である。北側に幅約15cmの落ち込みが見られる。確認面からの深さは20～21cmだが、南側が11cmとやや浅くなる。壁の立ち上がりは攪乱により不明瞭だが、ほぼ垂直になると考えられる。

東壁中央よりやや南の底面から、美濃窯産の小型丸碗が出土している。時期は18世紀と考えられる。

本遺構は、主軸の方向がSK-01・SK-02と類似していることや、覆土の状態から近世以降の墓坑と考えられる。

SK-08 (第35・37図、第14表、図版一六・二二)

2区南、H24グリッドの南端、SK-07の東に位置し、南側はH25グリッドに接する。レンチャーによる攪乱が著しい。平面形は東西0.55m、南北1.33mの長楕円状の土坑である。確認面からの深さは、12～17cmと浅く、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる

出土遺物が無いため時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降と考えられる。

SK-10 (第36図、図版一六)

3区、I35グリッド北西側、SZ-01の南東コーナー付近に位置する。南西側がSK-11と重複しており、SK-11の方が古い。平面形は東西1.45m、南北0.7mの長方形の土坑である。確認面からの深さは8～12cmで、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物が無いため時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降と考えられる。

SK-11 (第36図、図版一六)

3区、I35グリッド北西側、SZ-01の南東コーナー付近に位置する。北西側がSK-10と重複している。平面形は東西2.55m、南北は東側0.7m、中央部1.1m、西側1.0m、の長方形の土坑である。東西の主軸はN-60°-Wである。東から西向かって緩やかな傾斜を持って掘られており、確認面からの深さは、中央部付近で20cm、東端部で26cmを測る。底面は中央部に向かってやや緩やかに下がっており、東から中央部に向かって焼土が薄く堆積している。さらに中央部から東壁にかけて炭化物が層状に堆積しており、底面及び北西側の壁が被熱により硬化赤変していた。

出土遺物は無く時期は不明であるが、本遺構は、東側を焚口とする木炭焼成土坑と考えられる。

SK-12 (第36図、図版一六)

3区、I35グリッド北西側、SK-11の南東コーナー付近に位置する。平面形は、直径1mの円形土坑である。南東側に直径60cm、確認面からの深さ25cmのビットが掘られているが、ビットのほうが新しい。確認面からの深さは8~10cmと浅く、底面はほぼ平坦で、壁は外反気味に立ち上がる。

出土遺物が無いため時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降と考えられる。

SK-13 (第36図、図版一六)

2区南、H25グリッドの北東、SK-01の南に位置し、北端部はH24グリッドに入る。レンチャーによる攪乱が著しい。平面形は、直径が東西1.30m、南北1.16mの円形土坑である。確認面からの深さは、29~33cmで、底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物が無いため時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降と考えられる。

(3) 溝跡

SD-01 (第38・39図、第15表、図版一七)

2区南、調査区中央よりもやや南側のH27グリッドからI27グリッドを北東から南西にかけてやや斜めに横断する溝である。トレンチャーによる攪乱が著しい。溝はほぼ直線的に掘られており、断面形は南側が緩やかに立ち上がり、北側が急に立ち上がる。確認面での幅は東側で1.2m、西側で2.0mを測り、東から西に向かってわずかに広がりながら掘られている。確認面からの深さは、溝北側で46cm~50cmを測る。調査区西側において、溝に直交する形で2基の遺構(SX-01・02)が並んで掘られている。いずれの遺構も溝の壁を掘り込んでいる。

遺物は、覆土中から内耳土器や播鉢の破片が出土しているが、溝の時期は不明である。

SD-02・03・04 (第40図、図版一七)

SD-02は2区北、G22グリッドの調査区外から調査区南端を東西方向に横断し、H22グリッドで北へ屈曲し、SD-03・SD-04と重複する。溝南側の立ち上がりは、調査区外のため不明である。確認面での溝の幅は、屈曲する地点で上面1.40m、底面0.2mを測る。確認面からの深さは、屈曲地点で29cm、調査区西端部で63cmを測り、西に向かって深くなっている。形状は北側が緩やかに立ち上がり、南側はやや急激に立ち上がる。底面はやや平坦で、屈曲部分で40cm、調査区西端部で20cmと狭まる。

SD-03は、SD-02の北側約90cmのところを並行して掘られており、東側でSD-02・SD-04と重

複する。SD-04の東側で北へ屈曲する様子がわずかに確認できるが、その先は調査区外となる。確認面での溝の幅は、東側の幅1.90m、深さ38cm、調査区西端部で幅3.00m、深さ63cmを測り、SD-02同様西に向かって広く深くなっている。形状もSD-02同様北側が緩やかに立ち上がり、南側はやや急激に立ち上がる。底面は平坦で、東側で60cm、調査区西端部で1.0mと広がる。

SD-04は、SD-02・SD-03との重複地点から、南北方向に直進しており、SI-06の北東部コーナーを壊し、SI-07の東側で調査区外となる。東側の立ち上がりが調査区外のため全体の幅は不明であるが、1.4mまで確認できている。確認面からの深さは、45～47cmを測る。形状は南側ではV字状を呈するが、SI-06の東側断面では、逆台形状を呈するものと見られる。3城の溝の新旧関係ははっきりしないが、溝の状況からSD-04は、SD-02を深く掘り返したとも考えられる。

覆土の状況から、人為的に埋め戻されたと考えられる。

3条の溝とも出土遺物が無いため時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降の溝と考えられる。

SD-05 (第39図、図版一七)

1区F16グリッド南端からF15グリッドのSI-09の西側上面を通るもので、ほぼ南北に直線状に掘られており、北端は国道121号線の下に入り、南端は調査区外となる。規模は幅が概ね75cm～80cm、深さは20cm～25cmで、底面は平坦となっており、形状は逆台形状を呈す。

覆土中から土師器片が出土しているが、覆土の締まりは悪く、近世以降の溝と考えられる。

(4) その他の遺構

SX-01 (第39図、図版一七)

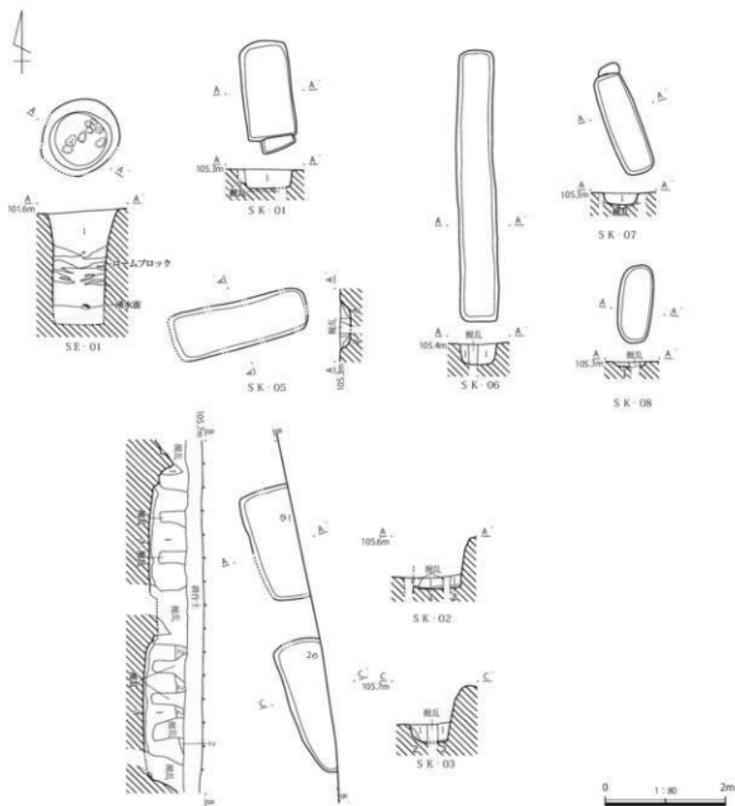
2区南、H27グリッド東端のSD-01に直交する形で掘られている。平面形は長方形を呈し、開口面での南北の長さは、南側壁の上面がトレンチャーによる攪乱を受けているため不明であるが約1.6m、底面はSD-01の北壁を挟り込むように掘り込んであり、1.7m前後となる。幅は東西ともトレンチャーによる攪乱を受けているため不明であるが、70cm前後と推定される。覆土の状況から、人為的に埋め戻している。

遺構西側の溝内から釘と思われる鉄製品が出土していることから、近世以降の木製の棺を埋葬した墓坑と考えられる。

SX-02 (第39図、図版一七)

2区南、H27グリッド東端のSD-01に直交する形で、SX-01の西側に並行して掘られている。平面形は長方形を呈し、開口面での南北の長さは、両壁の上面がトレンチャーによる攪乱を受けているため不明であるが約1.2m、底面はSD-01の北壁を挟り込むように掘り込んであり、1.4mを測る。また、炭化物が底面の南側中心に付着していた。幅は東西ともトレンチャーによる攪乱を受けているため不明であるが、60cm前後と推定される。覆土の状況から、人為的に埋め戻している。

形状がSX-01と類似していることから、近世以降の墓坑と考えられる。



SE-01
1 黒色土 ローム粒極微量。しまりあり。粘性大。

SK-01
1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック（径0.5～1cm）少量。炭化物粒微量。しまりあり。

SK-02
1 黒褐色土 ローム粒微量。炭化物粒極微量。しまりあり。
2 黒褐色土 ロームブロック（径0.5～1cm）少量。ローム粒微量。炭化物粒微量。しまりあり。

3 明黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック（径0.5～1cm）・炭化物粒微量。しまりあり。

SK-03
1 黒褐色土 ローム粒微量。炭化物粒極微量。しまりあり。
2 褐色土 ローム粒・ロームブロック（径0.5～1cm）少量。しまりあり。
3 明黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック（径1cm）微量。しまりあり。

SK-05
1 黒褐色土 ローム粒微量。しまりあり。

2 明褐色土 ローム粒・ロームブロック（径0.5cm）多量。しまりあり。

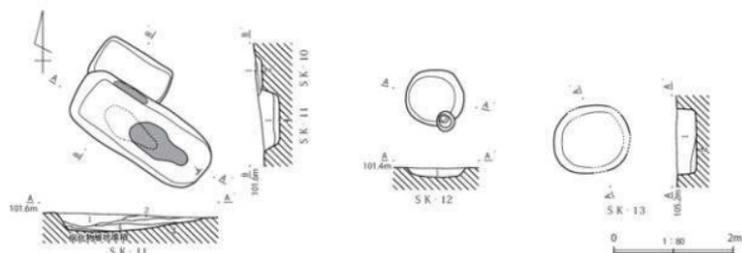
SK-06
1 黒褐色土 ローム粒微量。しまりあり。

SK-07
1 黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック（径0.5～2cm）微量。しまりあり。

SK-08
1 黒褐色土 ローム粒少量。ロームブロック（径0.5～2cm）微量。しまりあり。

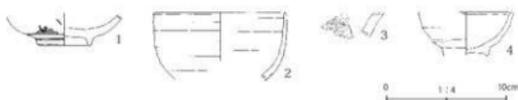
第35図 SE-01、SK-01～03・05～08実測図

第3章 松の木遺跡の調査



- SK-10
1 暗褐色土 ローム粒・炭土粒少量。しまりあり。
2 褐色土 ローム粒少量。しまりあり。
- SK-11
1 淡黒褐色土 ローム粒・炭化物粒・炭化物塊。炭土粒塊。しまりあり。
2 暗赤褐色土 焼土主体。炭化物少量。しまりあり。
3 暗褐色土 炭化物少量。炭土粒・ローム粒散在。しまりあり。
4 暗黒褐色土 炭化物多量。焼土粒・ローム粒散在。しまりあり。
- SK-12
1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック微量。しまりあり。
- SK-13
1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (径0.5cm) 微量。しまりあり。
2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (径0.5~1cm) 少量。しまりあり。

第36図 SK-10~13実測図



第37図 SK出土物実測図

第14表 SK出土遺物観察表

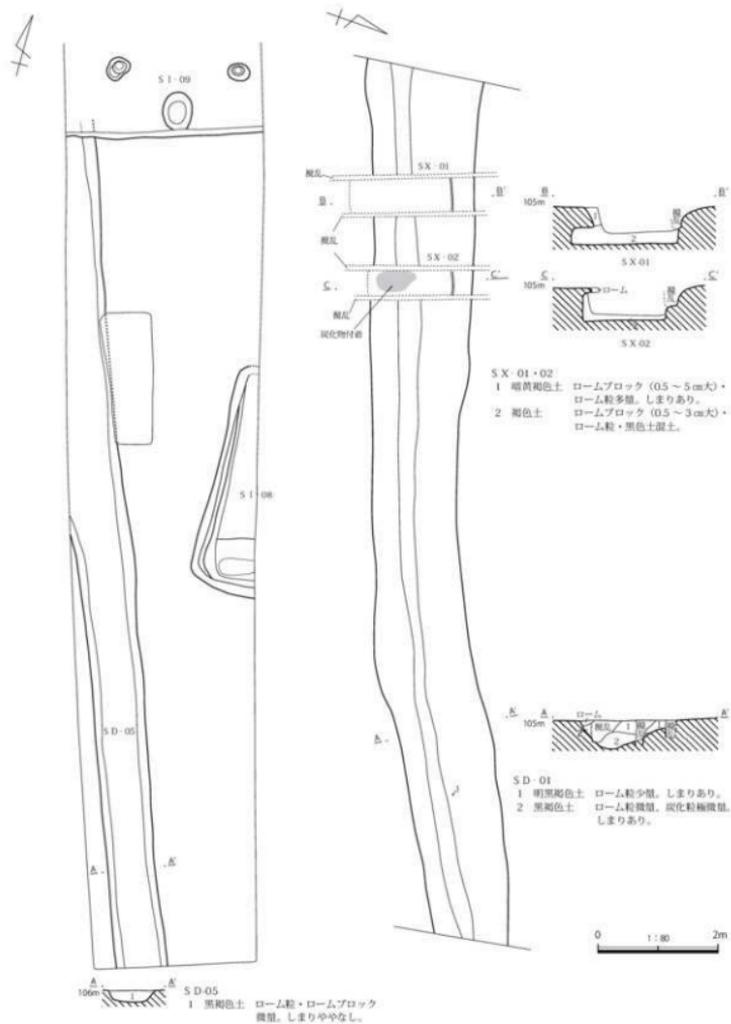
No.	器種	大きさ(cm・g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	肥前系 磁器 染付衝 丸筒	口径:- 高台径:4.5 器高:-	内面は無地。外面に草花文 底部に、内面に蛇の目輪刺ぎ痕残る	良好	良好	内外:10Y8/1灰白	底部完存 残高2.6cm	SK- 02No.1
2	美濃系産 陶器 丸筒	口径:(11.2) 底径:- 器高:-	内面から体部外面体部上位までロクロナ デ。胎輪(緑灰色軸)を施す 外面体部下位は回転ヘラケズリ	良好。白色細粒・ 微量	良好	内外上 半:2.5Y6/4赤褐 下半:5Y8/1灰白	口縁部1/4 体部1/4	SK- 03No.1
3	播鉢	口径:- 底径:- 器高:-	内:ロクロナデ、7~8条を1単位とする摺 り目を施す 外:回転ヘラケズリか 内外面薄く鉄輪を施す	良好。白色粒散 在。	良好	内外:7.5Y8/2黒	胴部一部	SK-07
4	美濃系産 陶器 小型丸筒	口径:(7.8) 高台径:3.8 器高:3.7	内面から体部外面体部上位までロクロナ デ。鉄輪を厚く施す 外面体部下端は回転ヘラケズリ(露胎) 高台内面は回転削り出し	良好。白色細粒微 量。	良好	軸:7.5Y3/2黒 胎土:1Y8/2灰白	口縁部一部 底部・高台 4/5	SK-08



第38図 SD-01出土遺物実測図

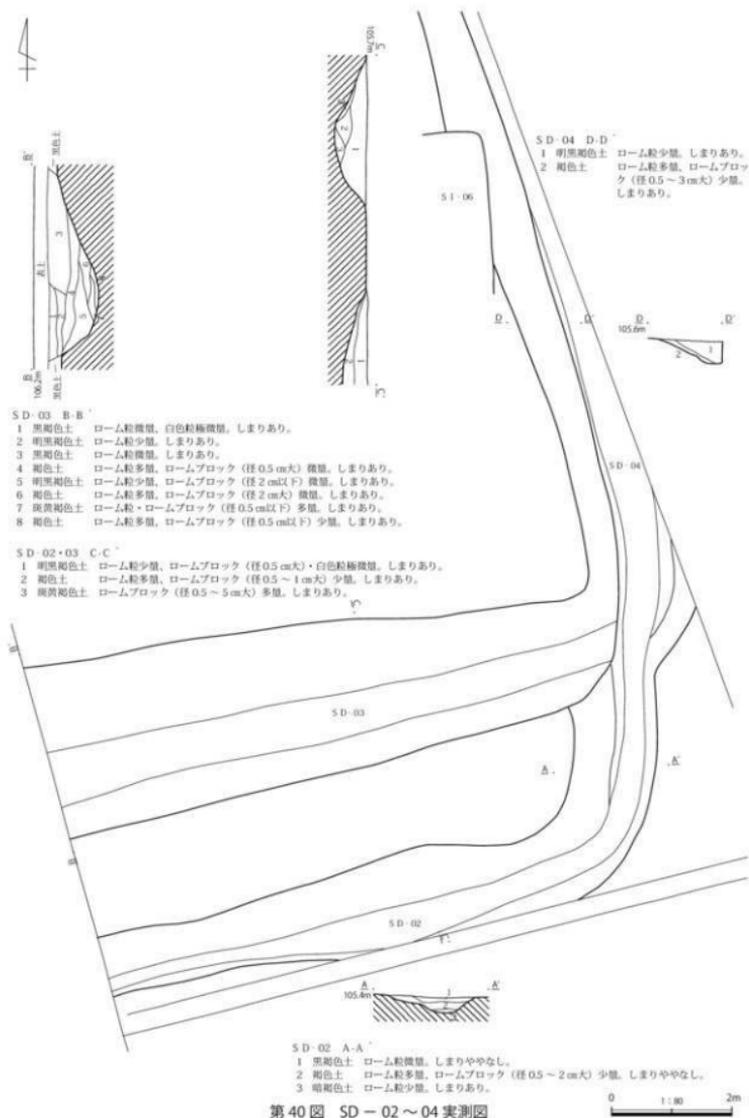
第15表 SD出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	内耳 土器	口径:- 底径:- 器高:-	内外面ナデ。押圧痕あり。耳は貼り付け 外面にスズ付着	良好。白色細粒や 少量。褐色粒散 在。	良好	内:7.5Y8/4にふ い場 外:10.5Y8/3/1黒褐	体部一部	SD- 01No.1
2	播鉢	口径:- 底径:- 器高:-	内:6~7条を1単位とする摺り目を施す 外:下端回転ヘラケズリ ロクロナ成り。内外面に鉄輪を施す	良好。白色粒散 在。	良好	内外:5Y8/3/1黒褐	体部一部	SD-01 東



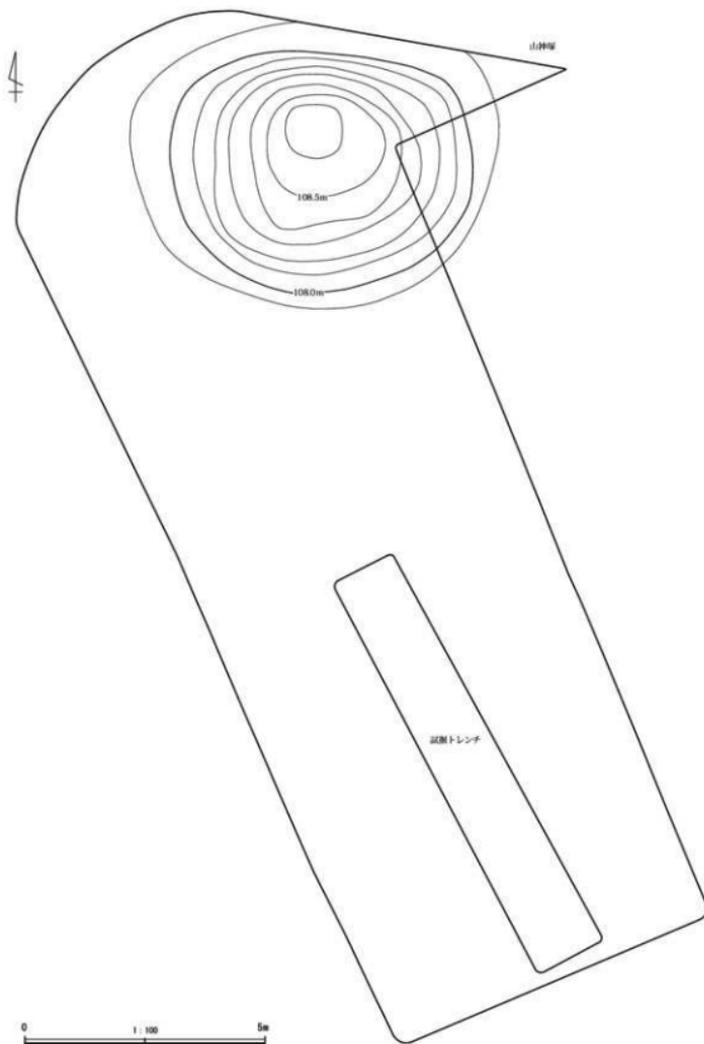
第39図 SD-01・05、SX-01・02 実測図

第3章 松の木遺跡の調査



第40図 SD-02~04実測図

第4章 山神塚の調査



第41図 山神塚・トレンチ配置図

第1節 調査の概要 (第41図)

塚は、松の木遺跡から北へ約1.300 m、国道121号線と市道7059号線の交差点の南東部に位置し、個人宅の敷地内にある。平成7年に発行された『鹿沼市遺跡分布地図』には、「市番号58 遺跡名 山神塚 所在地 上石川246-1 (小字名 山神) 時代 近世? 種別 塚 規模 東西径5.9 m、南北径6.2 m、高さ1 m 県番号 3093」と記載されている。

地主の方からの聞き取りによれば、塚の由来については聞いておらず、いつ頃作られたのかも知らないとのことであった。櫛の大木がそびえ立ち、祠や石碑等は無く、幣束を立てるため、以前は藁で作った覆いがしてあった。幣束は例年元旦に交換し、隣にある氏神様のお祭りの時に併せて供物をあげていたとのことである。塚の上にあった櫛の大木は、北側の市道拡幅の際に伐採された。

現況は、直径約7 m、高さ約1 mの不整円錐形を呈しており、周溝は確認できない。

調査は、雑草が著しく繁茂していたため盛土部分及びその周辺の除草作業から開始した。現況写真撮影及び基準杭の打設後、縮尺1/40、等高線10cmで現況図の作成を行った。その後表土除去作業及び盛土除去作業を人力で行い、セクション図作成とセクション写真の撮影を行った。

山神塚の調査終了後、塚南側の道路拡幅部分の遺構確認作業に入った。表土除去は重機にて行い確認面を精査したが、遺構及び遺物は確認できなかった。最後に試掘トレンチの清掃及び写真撮影を行い、調査を終了した。

第2節 発見された遺構と遺物 (第42・43図、第16表)

(1) 塚

現況図を作成した結果、標高107.9 mのラインが全周することから、このラインを塚裾部とした。北側の変形は道路整備の時に削平されたものである。現状での復元では、直径7.60 m、高さ0.8 mで円錐形を呈する。塚裾部を調査したが、周溝は確認されなかった。

土層確認用のベルトを十字に残して盛土を除去した結果、土層は2層に分かれるが、いずれもしまりは悪く突き固められた様子はなかった。埋葬施設等の遺構や埋納物は確認できなかったが、盛土南東部からかわらけが1点出土した。墳丘下を掘り下げたところ、旧表土が20～30cm堆積していることが確認できた。

かわらけは、1/2程の底部破片で、推定径1.8cmを測る。詳細な時期は不明であるが、底径が小さいことから近世の可能性が高い。

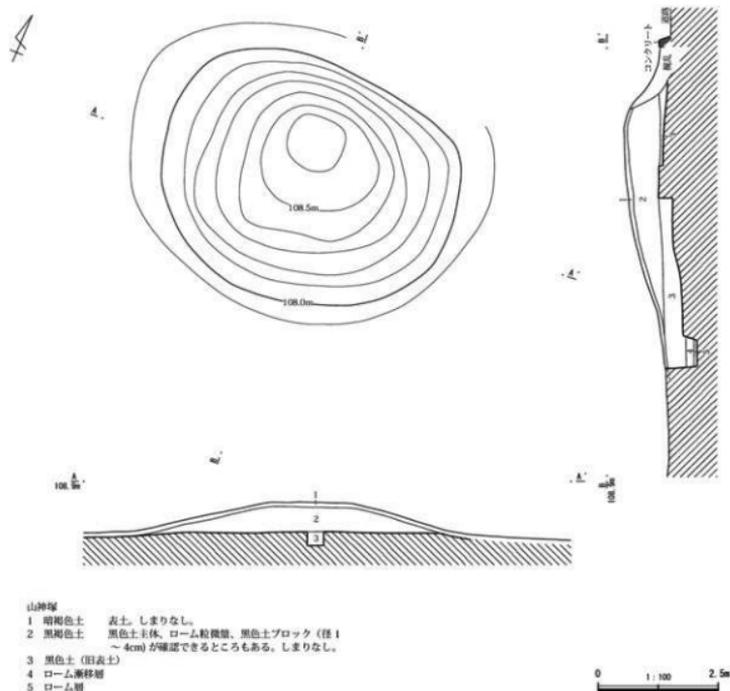
調査の結果、盛土の状況などから近世以降の塚と考えられる。

(2) 塚南側の調査

塚から国道に沿って南に延びる調査区に、遺構確認のため幅1.5 m、長さ約9 mの試掘トレンチを設定した。ロー面まで掘り下げ精査したが、遺構や遺物は確認できなかった。



所在調査時の山神塚 (平成22年2月)



第42図 山神塚実測図



第43図 山神塚出土遺物実測図

第16表 山神塚出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm ² g)	技法・特徴等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	かわらけ	口径:— 底径:(1.8) 器高:—	摩耗著しく技法不明	良好。白色細粒・灰色粒・褐色粒・黒色細粒少量。	不良	内外-7.5BR/3に赤・橙	底部1/2	盛土中

第5章 まとめ

(1) 松の木遺跡の時期について

今回の調査で、竪穴建物跡9軒、土坑13基、溝跡3条、井戸跡1基、方形周溝遺構1基、不明遺構2基が発見された。このうち竪穴建物跡9軒、土坑2基、方形周溝遺構1基は、出土した土器から古墳時代のもので、土坑については屋外貯蔵穴の可能性があり、方形周溝遺構は、方墳と考えられる。その他の遺構については第2章ですでに触れたが、陶磁器が出土した土坑が近世墓と考えられるほかは、時期は不明である。

溝(SD-01)で確認された2基の遺構(SX-01・02)については、溝との関係は不明であるが、墓坑である可能性が高い。

古墳時代の遺構から出土した土器はほとんどが土師器で、時期については中期から後期に該当する。栃木県内の当該期の土器編年については、1990年代までそれぞれで調査・報告されていた資料から細分案が示されていた(田熊・梁木1989、津野1995、藤田1999)。平成6年(1994年)から開始された宇都宮市東谷・中島地区の一連の発掘調査では、当該期の集落跡から900を超える建物跡が調査され、各報告書において出土した土器の編年を行っており(塚原1999、藤田・安藤2000、谷中・大島2001、内山2005、2010、2013)、全体では、古墳時代前期(4世紀末)から終末期(7世紀後葉)までを1～9段階に区分している(第17表)。

この東谷・中島地区の編年を参考にして出土した土器の時期を検討すると、主に模倣杯の特徴から[4段階]にSI-02・SI-03・SI-04・SI-05・SK-03・SK-09・SZ-01、[5段階]にSI-01、[6段階]にSI-06・SI-07・SI-08・SI-09が該当するものと考えられる。

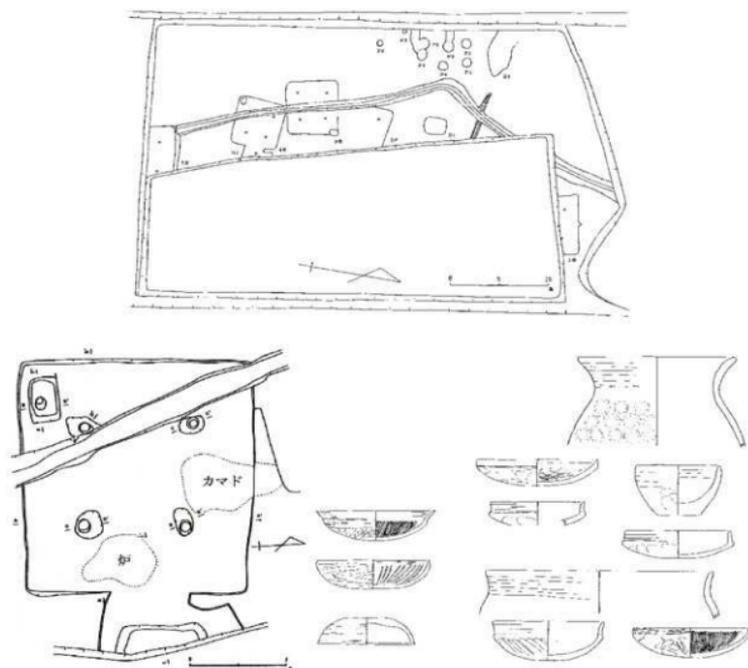
SI-04とSI-09については、部分的調査のため出土遺物も少なく不明な点もあるが、台地先端部に[4段階]の遺構が集中し、台地中央部に[6段階]の遺構が集中することから、それぞれの時期に該当するものとした。また、建物跡については、かなり隣接しており同時に存在したものではなく、特に[4段階]では、SI-03が先行するものと考えられる。

なお、平成12年の鹿沼市教育委員会調査の建物跡は[3段階]、昭和57年の下野考古学研究会調査の建物跡は、4号住居社が[4段階]、その他の住居社が[6段階]に該当するものと考えられる。(第44・45図)

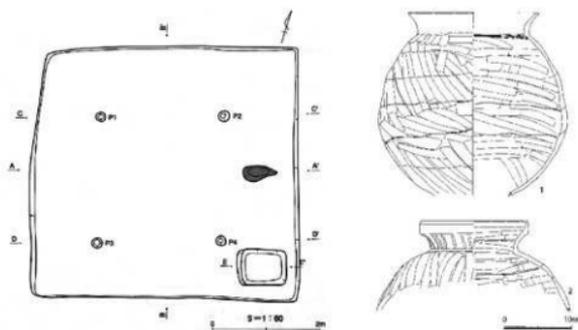
なお、平成12年の鹿沼市教育委員会調査の建物跡は[3段階]、昭和57年の下野考古学研究会調査の建物跡は、4号住居社が[4段階]、その他の住居社が[6段階]に該当するものと考えられる。(第44・45図)

第17表 東谷・中島地区遺跡群の時期区分と年代

区分	時 期	年 代	備 考
1段階 古墳	古墳時代前期末～中期初葉	4世紀末	杉村1期・権現山百目鬼1期
1段階 新相	古墳時代中期前葉	5世紀初葉	藤田1期
2段階	古墳時代中期中葉	5世紀前葉	藤田1期・権現山百目鬼1期 TK73～TK216型式期
3段階	古墳時代中期後葉	5世紀後葉	藤田1期・杉村2期・権現山百目鬼1期 TK208型式期
4段階 古墳	古墳時代中期末	5世紀末～6世紀初葉	藤田IV～V期・杉村3～4期 権現山百目鬼IV期・磯岡1期 TK23～TK47型式期
4段階 新相			
5段階 古墳	古墳時代後期前葉～中葉	6世紀前葉～6世紀中葉	杉村4期以降・権現山百目鬼V期 磯岡1期・TK115～TK119型式期
5段階 新相			
6段階	古墳時代後期後葉	6世紀後葉	杉村4期以降・権現山百目鬼VI期 磯岡2期・TK43型式期
7段階	古墳時代後期末	6世紀末～7世紀初葉	杉村4期以降・権現山百目鬼VII期 磯岡3期・TK209型式期
8段階	古墳時代終末期前半	7世紀前葉～7世紀中葉	権現山百目鬼VIII期・磯岡4期 現島1新相～旧期
9段階	古墳時代終末期後半	7世紀後葉	磯岡5期・現島II～IV期



第44図 昭和57年調査時の松の木遺跡全体図と4号住居社平面図及び出土遺物（報告書転載、一部加筆）



第45図 平成12年調査時のSI-01平面図と出土遺物（報告書転載）

(2) カマドと地床炉を持つ建物跡について

本遺跡の建物跡は、部分的な調査に終わったSI-04とSI-08を除いて全てカマドが設置されている。またSI-01とSI-02は併せて地床炉も確認されている。

栃木県内で、古墳時代において同建物跡内でカマドと地床炉の両者が確認されている事例は、鹿沼市松の木遺跡（昭和57年調査）、鹿沼流通業務団地内遺跡、宇都宮市雷雷山遺跡、東谷・中島遺跡群内の権現山遺跡、百目鬼遺跡、立野遺跡が挙げられる（第18表）。

建物跡は〔4段階〕に見られることが多いが、栃木県内でカマドが導入される時期にあたるため、それぞれの集落内で初期段階にカマドを導入した建物で、炉からカマドへ切り替えたものと見ることが出来る。鹿沼流通業務団地内遺跡F1区SI-195のように周溝を埋め戻した上にカマドを構築し、「堅穴掘削時にカマドの位置を想定していなかった」建物跡や、立野遺跡SI-24のように「廃絶後に凹みに石を埋め込んでいる」例は、このことを裏付けるものである。

カマド導入後も両者を使用していた建物跡が見られることがある。

立野遺跡SI-41は1辺約8mの大型建物跡で、周溝を埋め戻した上にカマドを構築しているため、後からカマドを構築したものであるが、4箇所の炉を持ち、粘土集中部も見られることから、「一般炊事・暖房用のカマド以外に、加熱・加工作業等に用いる炉や粘土を用意した「住居兼作業場」的な遺構と思われる。」としており、炊事以外の目的で炉を設置していたことを示すものである。

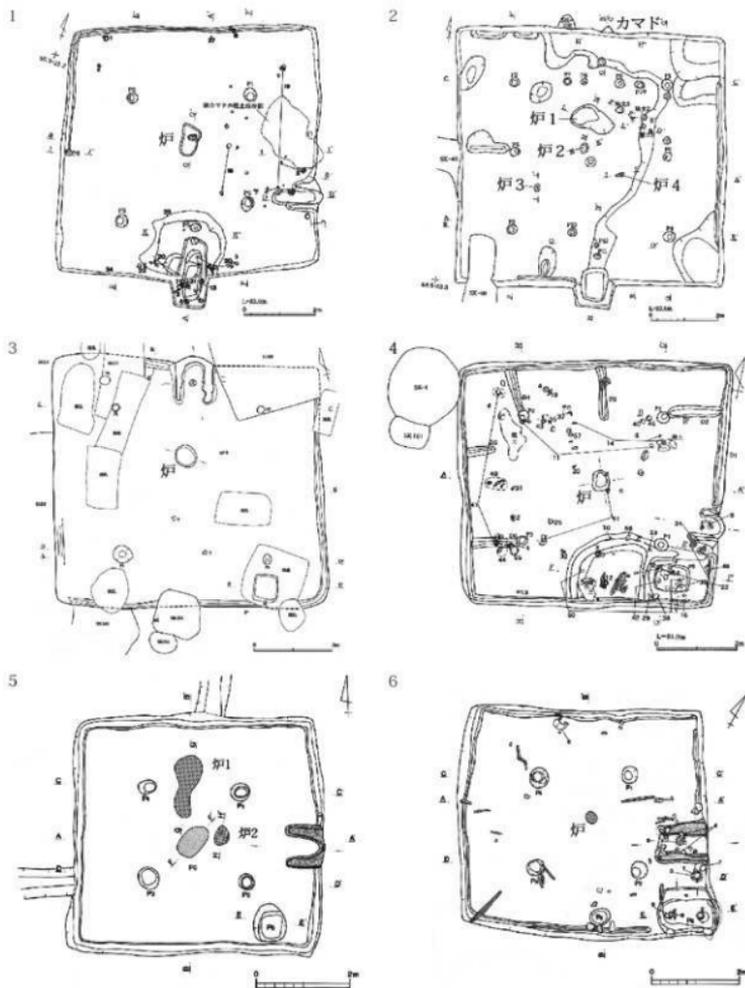
カマドとは別の調理用として、炉を設置していたとする捉え方もある。時代は下がるが、真岡市井頭遺跡や宇都宮市前田遺跡等では9世紀代の建物跡でカマドと炉を持つ例が見られ、この時期に出現する小型の台付甕が「床上の炉において取り囲み食事をとるのに適した器種」とし、小甕を「副食物煮炊具」ととらえ、「竈で主食を炊き、炉で副食物を煮る食事形態」が、「中世の絵巻物の田舎裏の中の竈で食事を調理し、カマドで別に鍋をかけて調理するた所風景の前段階に進んだものと評価できる」としている（小池・津野1994）。

本遺跡のSI-01・02でも炉を使用していた痕跡があり、カマドと炉を併用していた可能性がある。どちらも出土遺物が少なく作業用か調理用かの判断は難しいが、SI-02は、粘土の堆積や底石と見られる石製品が出土しているため作業用の炉の可能性もある。

第18表 栃木県内でカマドと地床炉を持つ遺跡（古墳時代）

所在地	遺跡名	遺構名	時期	カマド上の位置	報告内容等
鹿沼市	松の木遺跡	4号住居址	4段階	北壁中央にカマド遺跡。東壁中央に炉。	昭和7年野考古学研究会調査。カマドも炉も遺跡のみ。
		SI-04	5段階	東壁中央にカマド（完全に破壊）。北壁寄りの中火床炉跡に炉。	溝道は壁上面をわずかに削る。炉は壁土が積っており、使用されていた痕跡あり。
		SI-02	4段階	カマドは東壁から北壁に作り移し。北壁寄りの中火床炉跡に炉。	カマドの溝道は、壁上面をわずかに削る。炉は壁が崩壊され、壁土が積っており、使用されていた痕跡あり。
鹿沼市	鹿沼流通業務団地内遺跡	C1C31-107	7段階	北壁中央にカマド。床中央に焼円形跡の炉。	カマドは、壁を築造する前に築造し、その間に中火床に焼円形跡の炉を築き、その右の隅から溝道を掘り、壁を築き立てている。
		F1C31-198	4段階	東壁中央にカマド。北側廊下間に焼円形跡の炉1基。中央部に焼円形跡の炉2基。	溝道は、壁上面を埋め戻した後にカマドを構築。溝道は、壁の立ち上がりとそのまま利用。炉は1基が遺跡。炉2基は埋め戻されている。
		F1C31-199	4段階	北壁中央やや東寄りにカマド。床中央部に長楕円形跡の炉。	溝道は、壁上面を埋め戻した後にカマドを構築。溝道は、壁の立ち上がりとそのまま利用。炉は1基が遺跡。炉2基は埋め戻されている。炉の壁土には粘土と多量の骨を含む。
		F1C31-199	4段階	東壁中央やや南寄りにカマド。床中央部に円形跡の炉。	溝道は、壁の立ち上がりとそのまま利用。炉は部分的に強い穴を受け壊しているが築き立てられている。
宇都宮市	雷雷山遺跡	SI-04b	4段階	北壁中央やや東寄りにカマド。床中央部に円形跡の炉。	溝道は壁上面をわずかに削る。炉は、多量の壁土が入っているため、炉の可能性あり。
		5C31-04	4段階	東壁中央やや南寄りにカマド。床中央部に不整形円形跡の炉。	炉は焼熱の痕跡が明確ではほぼ全体が硬化せず。
宇都宮市	百目鬼遺跡	5C31-212	4段階	東壁中央南寄りにカマド。床中央部に円形跡の炉。	炉は壁土に多量の壁土を含むが、焼熱の痕跡は顕著ではない。
		5C31-24	4段階	北壁中央にカマド2基。床中央部北寄り焼円形跡の炉。	カマドは作り移す。炉は遺跡後段みに石を埋め込む。炉からカマドへの作り移す。
宇都宮市	立野遺跡	5C31-41	4段階	北壁中央やや南寄りにカマド遺跡。床中央部北壁に炉1基・2基、西よりに炉3基、東よりに炉4基。	溝道は壁上面を埋め戻した後にカマドを構築（炉からの灰もまた遺跡）。その後遺跡。炉3基は不要になり埋め戻し。
		4C31-10	4段階	東壁中央南寄りにカマド。床中央部に焼円形跡の炉。	溝道は壁土を水平状にわずかに削る。炉は、3cm程くぼみ、遺跡は焼熱せず。

(2) カマドと地床炉を持つ建物跡について



1. 立野遺跡5区SI-24

3. 百目鬼遺跡SI-212

5. 鹿沼流通業務団地内遺跡F1区SI-195

2. 立野遺跡5区SI-41

4. 権現山北遺跡4区SI-10

6. 鹿沼流通業務団地内遺跡F1区SI-199

第46図 カマドと炉を持つ建物跡 (一部加筆、各報告書転載)

(3) カマドの形態について

カマドの位置については、[4段階]のSI-02・03が東壁に構築されている。SI-02では、東壁のカマドを壊して北壁に付け替えている。SI-04は北壁に見られないため、未調査の東壁を持つ可能性がある。SI-05は北壁に構築されているが、全体を調査していないため東壁にもカマドがあったかどうかは不明である。ただし、通常カマドの脇に貯蔵穴が作られることが多いが、北カマドの脇に貯蔵穴が作られていないことから、SI-02同様東カマドからの作り替えの可能性もある。[5段階]のSI-01は東壁、[6段階]のSI-06～09は、全体が不明なSI-08を除いて全て北壁に構築されている。

カマドの形態については、SI-01・SI-02の東壁カマドは、壁の掘り込みが見られず、壁の上面を削ってわずかに建物外側に張り出す煙道を持つ。SI-02・SI-03とSI-05の北カマドは、壁の上半部を削ってわずかに建物外側に張り出す煙道を持つが、SI-03は、壁際をピット状に深く掘り込んでおり、同じ時期の中で構造の違いがみられる。袖は、不明なSI-01を除いていずれも壁から直線状に延びる。SI-06・07は、壁上半部を掘り込み、外側にゆるやかに立ち上がる煙道を持つ。袖は掘り込まれた壁から延び、袖の下に堀方を作るなど、規模・構造とも類似性がみられる。袖の下の堀方は、この2棟のみにみられる独特なものである。SI-09は、大きく半円状に壁を掘り込み、燃焼部も壁際になり、奥にピット状の掘り込みを持つ。ただし、南北の土層断面の状況から一度埋没したか埋め戻した後に、何らかの理由で掘り直した状況が見られるが、理由は定かではない。

隣接する鹿沼流通業務団地内遺跡や稲荷塚遺跡・大野原遺跡で見られるような、焚き口部分での河原石の使用や、床を掘り残し袖の芯とするものは、今回の調査では確認できなかった。

支脚は、SI-02北カマドで土師器裏と河原石を重ねたもの、SI-03で土師器高環と底脚高環の脚部を重ねたもの、SI-06で粘土混じりの土を固めた上に土師器環と裏胴部破片及び底部を重ねたものがあり多様である。なおSI-02では、南壁入口付近から長方形に加工された砂岩製の石が出土しているが、全面がかなり火を受けた状態であり、壊された東カマドの支脚として使用されていた可能性がある。

なお、SI-03・05・06の支脚は左袖側に寄っていることから、掛け口が2箇所あった可能性もある。

カマドは、東国においては古墳時代中期になって導入されたが、壁への掘り込みが無いものが古いタイプで、壁の掘り込みが少なく、上面をわずかに削る煙道を持つタイプが次の段階で出現する。古墳時代後期以降は、壁を掘り込むタイプが一般的となる。構築される場所も初期段階では東壁が多く、後期以降は北壁にみられるのが一般的であり、本遺跡でもおおむねその傾向がみられる。

(4) まとめ

松の木遺跡が所在する上石川・下石川周辺では、本遺跡の西側台地で鹿沼流通業務団地内遺跡、稲荷塚遺跡、大野原遺跡が発掘調査され、同じく古墳時代中期後半から後期後半の集落が確認されているが、古墳時代前期のものは確認されていない。このことについて鹿沼市史では、「4世紀から5世紀前半に、田川流域を開発し茂原古墳群や笹塚古墳群（宇都宮市）を作った集団の一部が、5世紀半ばに姿川と武子川の合流付近の開発に入り、5世紀後半になって上石川・下石川周辺の開発に入ったもの」とし、鹿沼流通業務団地内遺跡と稲荷塚遺跡は、「建物の配置状況から三つの集団が存在し、それぞれの集落に面した湿地の開発をして来づくりを行っていた」と想定しており、本遺跡もそうした集団のひとつと考えることもできる。

今回の調査によって台地先端の平坦部に古墳時代中期末～後期初頭の集落が、台地中央部に後期後半の集落が形成されていたことが確認できた。おそらく古墳時代中期末～後期初頭の集落は、南側の削平された箇所まで広がっていた可能性がある。集落全体の様子は不明であるが、中期末から後期にかけての集落は、西

側低地に面した台地を中心に形成されていたものと考えられる。また、台地縁部からは、1基ではあるが方墳が確認された。本遺跡における古墳時代後期の集落の墓域は、低地を挟んだ南側台地上に存在する川入古墳群と考えられているが、中期末までの墓域が台地縁部に存在した可能性がある。

過去の調査では、縄文土器や中世のかわらけ等も出土しているが、それらに伴う遺構は確認されていない。本調査においても、古墳時代以外の遺物は弥生時代中期後半の竈の一部と思われる小破片と内耳土器の小破片、近世陶磁器がわずかに出土したのみで、古墳時代以前や中世の遺構は確認できなかった。西側台地上では、旧石器、縄文、弥生の各時代の遺構が確認されている。また鹿沼流通業務団地内遺跡で確認された中世遺構は、石川氏館との関連が指摘されている。石川氏の居館とされる上石川堀ノ内館跡は、本遺跡がある台地上にあるため、今後の調査次第では、こうした古墳時代以外の遺構も確認されることに期待したい。

参考・引用文献

- 谷 旬 1982「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要7』(財)千葉県文化財センター
- 藤田典夫ほか 1987『稲荷塚・大野原』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 田熊清彦・梁木 誠 1989「古代下野の土器様相(1)」『栃木県考古学会誌第11集』栃木県考古学会
- 小池裕子・津野 仁 1994「脂質分析による土器分析—栃木県金山遺跡出土土器器・須恵器を例にして—」『研究紀要第2号』(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 津野 仁 1995「栃木県における6・7世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究第4号』東国土器研究会
- 藤田典夫 1999「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究第5号』東国土器研究会
- 初山孝行ほか 1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 今平利幸 1994『雷電山遺跡』宇都宮市教育委員会
- 名取昌昭ほか 1997「松の木遺跡」『下野考古学25』下野考古学研究会
- 栃木県立なす風土記の丘資料館 『第6回企画展 ムラ・まつり・古墳 —5世紀の北関東—』栃木県教育委員会
- 初山孝行ほか 1999『東谷・中島遺跡群 NO.1 磯岡遺跡(1区)』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 藤田典夫ほか 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 谷中 隆ほか 2001『権現山遺跡北部・百目鬼遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 鹿沼市史編さん委員会 2001『鹿沼市史 資料編 考古』鹿沼市
- 鹿沼市史編さん委員会 2004『鹿沼市史 通史編 原始・古代・中世』鹿沼市
- 内山敏行編 2005『東谷・中島遺跡群5 立野遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 永岡弘章 2007「松の木遺跡」『鹿沼市内遺跡発掘調査報告書1』鹿沼市教育委員会
- 内山敏行編 2010『東谷・中島遺跡群10 権現山遺跡・杉村遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 2010『第24回秋季特別展 ムラから見た古墳時代Ⅱ —古墳時代中期・後期を中心として—』栃木県教育委員会
- 内山敏行編 2013『東谷・中島遺跡群14 権現山遺跡南部・磯岡遺跡』栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団
- 小森哲也 2015「初期群集墳形成過程と首長墳の動向—宇都宮市東谷・中島遺跡群の調査成果から—」『栃木県考古学会誌 第36号』栃木県考古学会

付編 松の木遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

栃木県鹿沼市の松の木遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は竪穴住居跡であるSI-03から出土した炭化材10点である。SI-03の時期は、5世紀末～6世紀初頭と考えられている。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）にて鏡顕および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、広葉樹ではコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）とヤマハゼ、モチノキ属の3分類群、単子葉ではタケ亜科1分類群の、計4分類群がみられた。モチノキ属とタケ亜科がそれぞれ4点で最も多く、クヌギ節とヤマハゼが各1点であった。同定結果を表1に示す。

表1 松の木遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	遺構	遺物No.	種類	樹種	時期
1	SI-03	A	炭化材	タケ亜科	5世紀末～6世紀初頭
2	SI-03	B	炭化材	コナラ属クヌギ節	5世紀末～6世紀初頭
3	SI-03	B	炭化材	モチノキ属	5世紀末～6世紀初頭
4	SI-03	B	炭化材	モチノキ属	5世紀末～6世紀初頭
5	SI-03	B	炭化材	モチノキ属	5世紀末～6世紀初頭
6	SI-03	B	炭化材	モチノキ属	5世紀末～6世紀初頭
7	SI-03	C	炭化材	ヤマハゼ	5世紀末～6世紀初頭
8	SI-03	C-1	炭化材	タケ亜科	5世紀末～6世紀初頭
9	SI-03	C-2	炭化材	タケ亜科	5世紀末～6世紀初頭
10	SI-03	C-3	炭化材	タケ亜科	5世紀末～6世紀初頭

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版1 1a-1c(No.2)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(2) ヤマハゼ *Toxicodendron sylvestri* (Siebold et Zucc.) Kuntze ウルシ科 図版1 2a-2c(No.7)

小～中型の道管が単独ないし2～3個複合し、疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は平伏、直立、方形が混在する異性で、1～3列となる。

ヤマハゼは関東以西の本州、九州、四国に分布する、落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬だが、切削加工は普通に行える。

(3) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版 1 3a-3c(No.3)、4a-4c(No.6)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は 20～40 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性で、幅 1～5 列となる。

モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

(4) タケ亜科 Subfam. Bambusoideae イネ科 図版 1 5a(No.1)、6a(No.8)、7a(No.9)、6a(No.10)

向軸側の原生木部、その左右の 2 個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の程である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間、日本には 12 属ある。

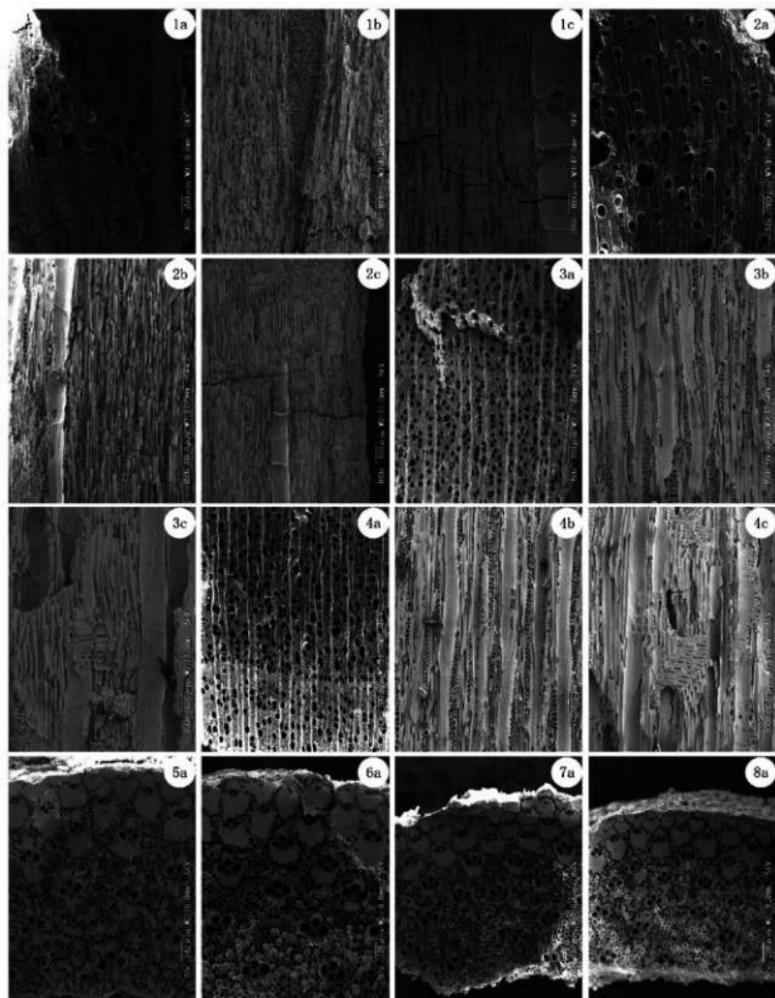
4. 考察

同定の結果、SI-03 から出土した炭化材 10 点は、クヌギ節とヤマハゼ、モチノキ属、タケ亜科であった。試料はいずれも焼けた建築材であったと考えられている。クヌギ節とヤマハゼ、モチノキ属は堅硬な樹種であり（伊東ほか、2011）、建築材に堅硬な樹種が選択された可能性がある。また、タケ亜科は屋根材などに利用されたと考えられる。いずれも遺跡周辺に生育可能な樹種であり、遺跡周辺で伐採し、利用していたと考えられる。

なお、宇都宮市の砂田 A 遺跡や上三川町の多功南原遺跡の古墳時代末頃の竪穴住居跡出土炭化材では、クヌギ節、アカガシ亜属などがみられるが（伊東・山田編、2012）、ヤマハゼやモチノキ属は確認されていない。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—、449p、海青社。



図版1 松の木遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

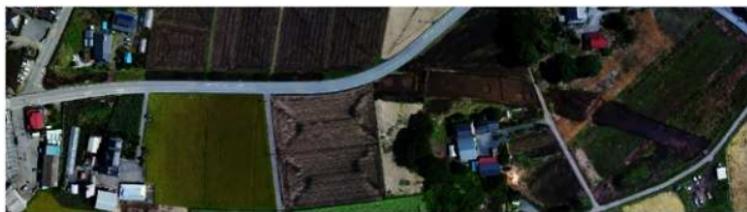
1a-1c. コナラ属タヌギ節 (No. 2)、2a-2c. ヤマハゼ (No. 7)、3a-3c. モチノキ属 (No. 3)、4a-4c. モチノキ属 (No. 6)、
5a. タケ亜科 (No. 1)、6a. タケ亜科 (No. 8)、7a. タケ亜科 (No. 9)、8a. タケ亜科 (No. 10)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

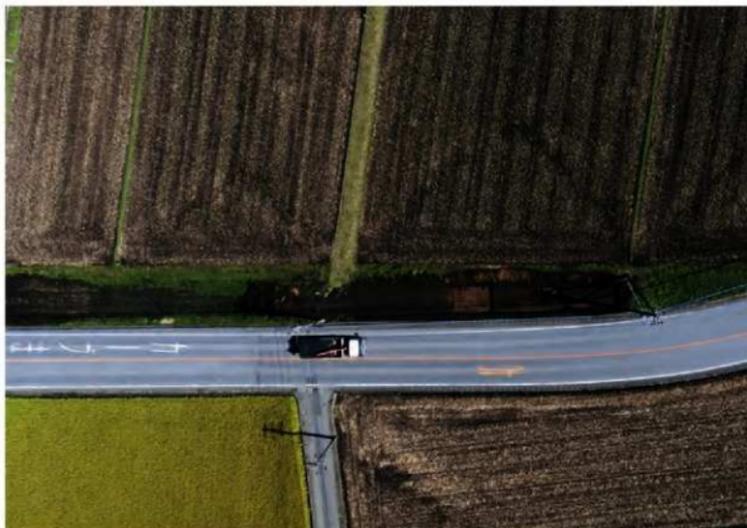
写真図版



松の木遺跡・山神塚 南から



松の木遺跡・山神塚 上空から



松の木遺跡 1区



松の木遺跡 2区



松の木道跡 3区



山神塚



2区北端テストピットローム土層断面（南から）



2区作業風景（北西から）



2区遺構確認状況（南から）



SI-01土層断面（南から）



SI-01遺物出土状況（南から）



SI-01南壁際遺物出土状況（南から）



SI-01南壁際遺物出土状況（北西から）



SI-01調査風景（南東から）



SI-01 貯蔵穴土層断面 (南から)



SI-01 貯蔵穴完掘 (南から)



SI-01 カマド土層断面 (西から)



SI-01 カマド完掘 (西から)



SI-01 地床炉 (東から)



SI-01 完掘 (南から)



SI-02 土層断面 (南から)



SI-02 遺物出土状態 (南から)



SI-02 南壁際中央遺物出土状態 (北西から)



SI-02 北カマド右手前のくぼみ完掘 (南から)



SI-02 南西隅粘土出土状況 (北から)



SI-02 貯蔵穴土層断面 (南から)



SI-02 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



SI-02 貯蔵穴完掘 (西から)



SI-02 東カマド土層断面 (南から)



SI-02 東カマド完掘 (西から)



SI-02 北カマド土層断面 (東から)



SI-02 北カマド土層断面 (南から)



SI-02 北カマド完掘 (南から)



SI-02 北カマド完掘 (支脚なし、南から)



SI-02 北カマド左手前の炉完掘 (東から)



SI-02 北カマド内支脚完掘 (南東から)



SI-02 入り口付近完掘 (南から)



SI-02 完掘 (南から)



SI-03 土層断面 (東から)



SI-03 遺物出土状況 (南から)



SI-03 焼土確認状況 (北西から)



SI-03 北西部床面炭化物(タケ垂科)確認状況(東から)



SI-03 貯蔵穴土層断面 (南から)



SI-03 貯蔵穴完掘 (南から)



SI-03 作業風景 (南から)



SI-03 支脚出土状況 (南西から)



SI-03 カマド土層断面 (西から)



SI-03 カマド完掘 (西から)



SI-03 完掘 (南から)



SI-04 遺物出土状況 (北から)



SI-04 完掘 (南西から)



SI-05 遺物出土状況 (南から)



SI-05 カマド左側遺物出土状況 (南から)



SI-05 カマド遺物出土状況 (南から)



SI-05 カマド土層断面（東から）



SI-05 カマド完掘（支脚あり、南から）



SI-05 カマド支脚（東から）



SI-05 完掘（南から）



SI-06 土層断面（東から）



SI-06 遺物出土状況（南から）



SI-06 南西柱六部遺物№1 下位の遺物（南から）



SI-06 カマド左側遺物出土状況（南西から）



SI-06 カマド周辺遺物出土状況 (南から)



SI-06 カマド・貯蔵穴周辺遺物出土状況 (南東から)



SI-06 貯蔵穴土層断面 (南から)



SI-06 貯蔵穴完掘 (南から)



SI-06 入口ビット土層断面 (南から)



SI-06 カマド土層断面 (東から)



SI-06 カマド支脚出土状況 (南から)



SI-06 完掘 (南から)



SI-07 土層断面 (東から)



SI-07 カマド土層断面 (東から)



SI-07カマド完掘 (南から)



SI-07 カマド完掘 (南東から)



SI-07 完掘 (南から)



SI-07 完掘 (南から)



2区完掘 (南から)



SI-08 完掘 (南から)



SI-09 土層断面 (南から)



SI-09 遺物出土状況 (南から)



SI-09 南壁際遺物出土状況 (北西から)



SI-09 カマド遺物出土状況 (南から)



SI-09 カマド土層断面 (南から)



SI-09 完掘 (南から)



1区完掘 (北から)



3区北端 SZ-01 周辺遺構確認状況 (北から)



SZ-01 調査状況 (南から)



SZ-01 遺物出土状況 (南から)



SZ-01 東部土層断面及び遺物出土状況 (南から)



SZ-01 拡張後完掘 (北から)



SK-04 土層断面 (東から)



SK-04 遺物出土状況 (南から)



SK-04 完掘 (南から)



SK-09 土層断面 (南から)



SK-09 遺物出土状況 (南から)



SK-09 完掘 (南から)



SK-02 土層断面 (西から)



SK-02 遺物出土状況 (南から)



SK-02 完掘、SK-03 遺物出土状況 (南西から)



SK-03 土層断面 (北から)



SK-01 完掘、SK-06・07 土層断面 (南から)



SK-06・07 完掘 (南から)



SK-05 完掘 (南から)



SK-10・11 土層断面 (南から)



SK-10・11 完掘 (南から)



3区遺構確認作業風景 (北から)



SK-08 完掘 (西から)



SK-12 完掘 (南から)



SK-13 完掘 (東から)



SE-01 土層断面 (南から)



SE-01 完掘 (南から)



SD-01 東半完掘及び土層断面 (東から)



SD-01 西部完掘 SX-01・SX-02 (東から)



SD-01 完掘 (東から)



SD-02~03 (東から)



SD-02~04 (北東から)



SD-05 (南から)



SX-01 土層断面 (東から)



山神塚全景（調査前・西から）



山神塚現況（南から）



山神塚盛土除去作業風景（南東から）



山神塚土層断面（南から）



山神塚中央部土層断面（南東から）



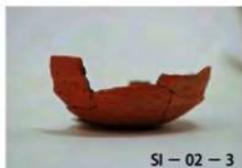
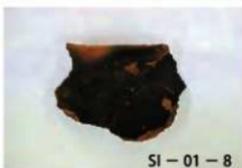
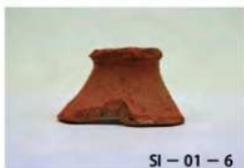
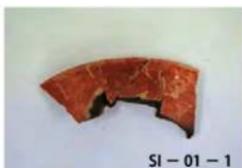
山神塚及び周辺調査区全景（調査前・南東から）

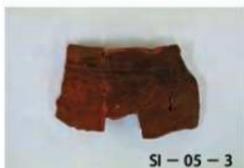
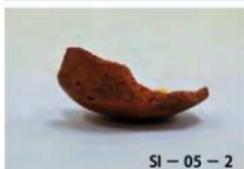


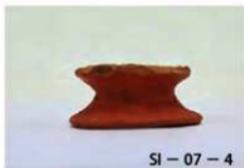
山神塚南側試掘トレンチ（南から）



工事後の松の木遺跡









SI-09-3



SI-09-4



SI-09-5



SI-09-6



SI-09-7



SI-09-10



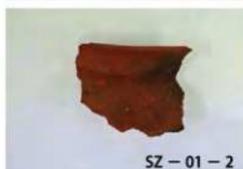
SI-09-8



SI-09-11



SZ-01-1



SZ-01-2



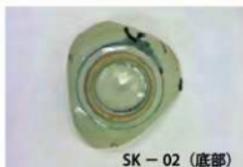
SK-09-1



SK-09-2



SK-02



SK-02 (底部)



SK-03



SK-08

報告書抄録

ふりがな	まつのきいせき・やまがみづか
書名	松の木遺跡・山神塚
副書名	快適で安全な道づくり事業費（補助）一般国道121号下石川工区に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第394集
編著者名	中三川 渉
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2019年11月28日（令和元年11月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北 緯 東 経 ° ' " ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まつのきいせき 松の木遺跡	かみまし 鹿沼市 下石川	09205 3097	36° 30' 56" 139° 48' 35"	20170703～ 20180329	2,313.7㎡	国道改良工事
やまがみづか 山神塚	かみまし 鹿沼市 下石川	09205 3093	36° 31' 6" 139° 48' 31"	20170703～ 20180329	186.3㎡	国道改良工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な 遺 構	主な 遺 物	特記事項
松の木遺跡	集落跡	古墳時代 近世以降	竪穴建物跡9軒・土坑2期・方墳1基 溝4条・土坑11基・井戸1基・不明遺構2基	土師器・須恵器 近世陶磁器	古墳時代中期末～後期後葉の集落跡
山神塚	塚	近世以降	塚1基	かわらけ	

要 約	<p>松の木遺跡は黒川左岸の台地上に所在する。黒川の支流が形成した支谷により東西を挟まれた南西に延びる台地上で、低地を挟んだ西側台地上には鹿沼流通業務団地内遺跡、稲荷塚遺跡、大野原遺跡が存在し、いずれも本遺跡と同時代の集落跡が調査されている。今回の調査で、古墳時代中期末葉から後期後葉の竪穴建物跡が9件確認された。また、中期末葉から後期初頭の建物跡付近で確認された2基の円筒型の土坑は、屋外貯蔵穴と考えられる。建物跡は、中期末から後期初頭が台地先端部付近に、後期後半の建物跡は台地中央部にあつて立地が異なる。各建物跡は近接していることから同時に存在したものではなく、建替があつたものと考えられる。過去の調査も考慮すると、古墳時代後期の集落は、西側低地に面した台地が中心になるものと考えられる。また台地縁辺部から方墳が確認されたことから、中期末から後期初頭の墓域が存在していた可能性もある。山神塚は、盛土の状況等から近世以降の塚と考えられる。</p>
-----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第 394 集

松の木遺跡・山神塚

— 快速で安全な道づくり事業費（補助）国道 121 号下石川工区に伴う発掘調査 —

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市瑞田 1-1-20

T E L 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

T E L 028 (643) 1011

令和 元 年 1 月 2 8 日発行

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

印刷 株式会社大塚カラー
